

大分県社会教育委員会議による研究調査報告書

「地域社会のウェルビーイングを実現するための  
社会教育の役割」について

大分県社会教育委員会議

令和7年2月13日

## はじめに

大分県の社会教育委員会議においては、これまで委員の2年の任期ごとに協議のテーマを定め、取りまとめたものを建議や提言として大分県教育委員会に提出してきた。参考までに、過去5期分のテーマを列挙する。「学校を核とした地域づくりの具体的方策について」（令和3～4年度）、「地域の持続的発展に資する人材の育成について」（令和元～2年度）、「青少年の体験活動の充実・深化を図る社会教育行政のあり方について」（平成29～30年度）、「大分県が進める地方創生につながる社会教育のあり方について」（平成27～28年度）、「『協育』ネットワークの充実を図るための社会教育行政の推進」（平成25～26年度）となっている。これらの建議が大分県の社会教育行政に少なからず影響を与えたことは想像に難くなく、今後も同様の役割を果たしていかなければならない。

さて、近年グローバル化が加速し、聞き慣れない見慣れない言葉に出会うことが多くなった。前からそうであったような気もするが、世間への広まり方は格段に早くなった。特に、政府関連の文書に登場すると、その傾向は著しい。その中のひとつに「ウェルビーイング」がある。第11期中央教育審議会生涯学習分科会の議論の整理（令和4年8月）では「すべての人のウェルビーイングを実現する、共に学び支え合う生涯学習・社会教育に向けて」というサブタイトルを付けている。また、第4期教育振興基本計画（令和5年6月閣議決定）のコンセプトの中にも「日本社会に根差したウェルビーイングの向上」が掲げられている。

ウェルビーイングの概念はそれほど新しいものではなく、1948年に発効した「世界保健機関（WHO）憲章」の中にすでに謳われていた。「病気でないとか、弱っていないということではなく、肉体的にも、精神的にも、そして社会的にも、すべてが満たされた状態（well-being）にあること」（日本WHO協会訳）と定義されている。第二次世界大戦後の社会と現在の社会を単純に重ねて考えることはできないが、今こうしてウェルビーイングが頻出する背景には、人が、地域が、国が、地球が「必ずしも満たされていない状態」にあるからではないかと想像できる。そう考えると、常に人や地域に寄り添ってきた社会教育が先頭に立ってウェルビーイングの実現に向けた取組を行うことには大きな意味があるのではないだろうか。

改めて、私たちは地域社会とそこに暮らす地域住民の幸せ（ウェルビーイング＝満たされた状態）をどのように考えたらよいのだろうか。「地域またはそこに暮らす人々を大切に思う心をみんながもっている状態」、「歴史や文化、伝統、自然等の資源があり、みんなが誇りをもっている状態」、「産業（働く場所）やインフラ（教育や福祉を含む）が整っている状態」、「地域の未来に希望がもて持続的発展が期待できる状態」などが、社会教育委員会議の中で共有されたところである。このようにして始まった今期（令和5～6年度）の社会教育委員会議であった。

このような学びをベースに、今期は社会教育委員が自ら研究調査活動を行うこととなった。社会教育委員のもつネットワーク力を存分に生かし、大分県内で「人づくり、つながりづくり、地域づくり」に取り組む個人や団体等がリストアップされた。研究調査の方法はインタビューであり、活動の概要、沿革・取組の経緯、背景・課題、組織・体制、活動の実際、まとめ、を基本項目とし、各委員がインタビューの内容に応じてアレンジした。公私ともに多忙の中、意欲的に研究調査活動に取り組んでいた社会教育委員一人一人に感謝申し上げる。

# 【目次】

はじめに

1.	研究調査のねらい	1
2.	研究調査報告	
	【研究調査にあたって】	3
	【研究調査先一覧・場所】	4
	【カテゴリー・グループ】	
	○防災（3）	5
	○地域づくり [交流]（6）	12
	○地域づくり [産業]（1）	28
	○若者支援・子ども支援（7）	32
	○高齢者支援（1）	48
	○生涯学習（1）	50
3.	研究調査の分析と考察	52
	おわりに	57
	【巻末資料】	
	大分県社会教育委員名簿	59
	調査審議の経過	60
	関係法規	61

## 1. 研究調査のねらい

### (1) 研究調査活動に至った経緯

今期の大分県社会教育委員会議は、委嘱された時点で明確な協議テーマが提示されていたわけではない。もちろん、社会教育課には大分県の抱える課題について、解決の方策を探らなければならない複数のテーマがあることは推し量れた。しかし、社会教育行政の施策ありきではない、独任制の社会教育委員の力に委ねる方法で、今期の会議を進めていくこととなった。

さて、改めて社会教育委員の役割を、根拠法となる社会教育法に求めてみよう。

第十七条 社会教育委員は、社会教育に関し教育委員会に助言するため、次の職務を行う。

- 一 社会教育に関する諸計画を立案すること。
- 二 定時又は臨時に会議を開き、教育委員会の諮問に応じ、これに対して、意見を述べること。
- 三 前二号の職務を行うために必要な研究調査を行うこと。

法律では、「社会教育に関する諸計画を立案するために」もしくは「教育委員会の諮問に対して意見を述べるために」、「必要な研究調査を行うこと」が職務として明記されている。また、同条第2項には「教育委員会の会議に出席して社会教育に関し意見を述べることができる」とあり、これも十分に研究調査の必要性につながっている。

### (2) 大きなテーマはウェルビーイングの実現

今期は、教育委員会からの諮問や協議事項の要請は直接的になかったものの、いつでも求めに応じられる準備はしておいた方がよい。そこで、社会教育委員の幅広いネットワークに期待して、それぞれがインタビュー調査を行うよう計画を立てた。インタビュー調査を実施するにあたり、包括的なテーマとして「地域社会と地域住民のウェルビーイングの実現」とした。できれば社会教育事業や社会教育活動であることが望ましいが、地域を見渡せば「あれも十分社会教育活動だと言えるのではないか」という活動はいくらでもある。調査対象については、あまり制約を課すのではなく、結果的に社会教育とも解釈できる活動でもよいだろう、と広く事例を収集することにした。

調査対象を取組内容から整理分類すると、およそ5つに分けられた。「防災」(3)、「地域づくり」(7)、「若者支援・子ども支援」(7)、「高齢者支援」(1)、「生涯学習」(1)である。「地域づくり」と「若者支援・子ども支援」がそれぞれ7件ずつあり、大分県社会教育委員の関心やネットワークの状況が垣間見られるようである。つまり、国の調査や統計等で把握されている社会教育活動の多くは、「個人の要望」に属する趣味・教養・スポーツ・レクリエーション関連のものが多く、「社会の要請」に応える現代的課題のような分野は必ずしも多くないにも関わらず、今回の調査ではほぼ現代的課題に関連する内容が収集されたのである。

このように収集された取組内容を見ると、ウェルビーイングを実現する上で大切な、地域にある課題解決を目指し、地域の有志が集い活動を始めた取組に、社会教育委員の関心があると言えるだろう。地域の現実には、若者が地域から転出していってしまう社会減、それがもたらす少子化と相対的に増えてしまう高齢者の人口比、天命を全うしこの世を去ることによる自然減、社会の切実な課題が顕在化することで生じる「地域の持続可能性への不安」などが共通している。防災は地域住民の命を守り安全を確保する活動、地域づくりは地域住民の幸せをつくる活動、若者・子ども

支援は未来の地域の担い手に活躍の場を与え、地域の思いを伝える活動、と読み替えることができる。

### (3) 今ある活動で十分か（社会教育としてできることは何か）

今回収集された取組には、さまざまな背景があり、活動を始めるに至った経緯や動機づけがあり、それを継続している理由があるわけだが、共通に言えることはそれが地域で引き継がれることの困難さである。後継者問題は「家」や「家業」だけでなく、地域活動にも暗い影を落とす。さて、ここに社会教育としてできることは何なのか、これがとても悩ましい。「立ち上げた人」あるいは「立ち上げに関わった人々」が手を離れたところで活動に終止符が打たれるのは珍しいことではない。活動の継続ができるように組織化された社会教育関係団体や自治会組織等も存続の危機にある。ボランティアな活動がメンバーの更新をしながら継続されるには何が必要なのだろうか。今回の研究調査活動の成果の向こうには、その見通しを準備することが求められているように思うが、一朝一夕にできるような代物ではなさそうだ。

現行の学習指導要領では、「社会に開かれた教育課程」が掲げられ、学校教育は自己完結性から抜けだし、「地域とともにある学校づくり」をしていこう、という見通しが示されている。総合的な学習の時間を活用して、地域を題材とした探究的な学びを充実させ、子どもの頃から地域の課題解決に関心をもたせよう、と学校での努力が始まった。「よりよい学校教育を通じて、よりよい社会を創る」ことにつないでいかなければならない。一方、社会教育の側からは、地域住民（地域の大人）を巻き込むためには「学校を核とした地域づくり」が有効であり、「地域学校協働本部」に地域人材が集まり関わることで、活気ある地域を再生しよう、とする流れがある。もちろん、学校頼みだけでは不十分であり、地域が主体となって子どもと協働する機会（教室・習い事・スポーツ活動・行事・祭事等）も必要である。地域の大人と継続的に関わることで、子どもにとってのふるさとが形成されるからだ。地域の持続可能性が危ぶまれる中で、今だからこそ、学校教育と社会教育が歩み寄り、心をひとつにする必要がある。

誰がイニシアティブを取ればよいのだろうか。それに答えがあるわけではないが、現状に課題があるのであれば、何かを起点にして、少しでも課題が改善に向かうよう取り組んでいく必要がある。その起点とはきっと新しい発想やアイデア等から導かれるものであろうし、それを生み出せるフラットな意見交流の場が不可欠となるのだろう。そこに参加する人は現役世代に限定される必要はなく、高齢者や子どもも素直な気持ちを表明できた方がよいだろう。そこで交わされる意見（発想やアイデア等）とは、新規に何かを立ち上げることのみを指すのではなく、今回の研究調査のように、地域の活動の詳細を知り、つないでいったり、プラットフォームをつくったりということも含むだろう。地域を越えた、広域の出会いが生まれることで、新たな可能性が広がるかも知れない。そのような、社会教育だからこそできる「未来の新たなデザインづくり」が理想ではないだろうか。

### (4) 思いのつながる社会教育活動を目指して

市町村で把握されていない社会教育活動を含めると、地域にはたくさんの活動の場がある。実に楽しく愉快的な活動もあれば、使命感に駆られて継続している活動もある。高齢になり後進に譲りたいが、後継者が見つからないこともあるだろう。ただ、活動を継続している人の「熱い思い」がそこにはあるはずである。まずは思いだけでもつなぎ、引き継ぐことが必要ではないだろうか。今回の研究調査が、「思いをつなぐ」きっかけづくりになればと願っている。

## 2. 研究調查報告

## ◇研究調査にあたって【概要】

### 地域社会のウェルビーイング（地域社会の幸せ）の考え方

#### 【出された意見から】

- ・一人ひとりにあった支援が必要
- ・信頼できる他者の存在
- ・親の支援の必要性
- ・すべての人が助けると言える社会
- ・失敗を許せる社会へ
- ・地域の人と関わる場
- ・子どもの姿から学べるもの
- ・年代による意識の差
- など

#### 【まとめると】

#### 『地域の今に満足でき、地域の未来に希望が持てる状態』

- ① 地域またはそこに暮らす人々を大切に思う心をみんなが持っている状態
- ② 歴史や文化、伝統、自然等の資源があり、みんなが誇りを持っている状態
- ③ 産業（働く場所）やインフラ（教育や福祉を含む）が整っている状態
- ④ 地域に持続的発展が期待できる状態

### 幸せな社会の実現のために社会教育に何ができるのか

### 「地域社会の幸せを実現するため」に活動している人や団体についての調査

#### 【調査対象】

- ・活動を通して地域に活力を与えている個人や団体
- ・社会教育関係団体に関わらず、広く一般社会において活動している個人や団体
- ・社会教育委員自らが選定（個人的なつながりや興味・関心のある場所等）

#### 【調査内容】

- ・活動を始めた経緯や背景
- ・活動の実際
- ・活動の成果や課題
- ・これからの願い
- 等

#### 【調査方法】

- ・社会教育委員が直接現地を訪問し、インタビューを通して内容を聞き取る
- ・インタビューシートに内容をまとめ、報告

### 研究調査先の分類（カテゴリー別）

- ◇防災
- ◇地域づくり(交流)
- ◇地域づくり(産業)
- ◇若者支援・子ども支援
- ◇高齢者支援
- ◇生涯学習

## 調査の実施

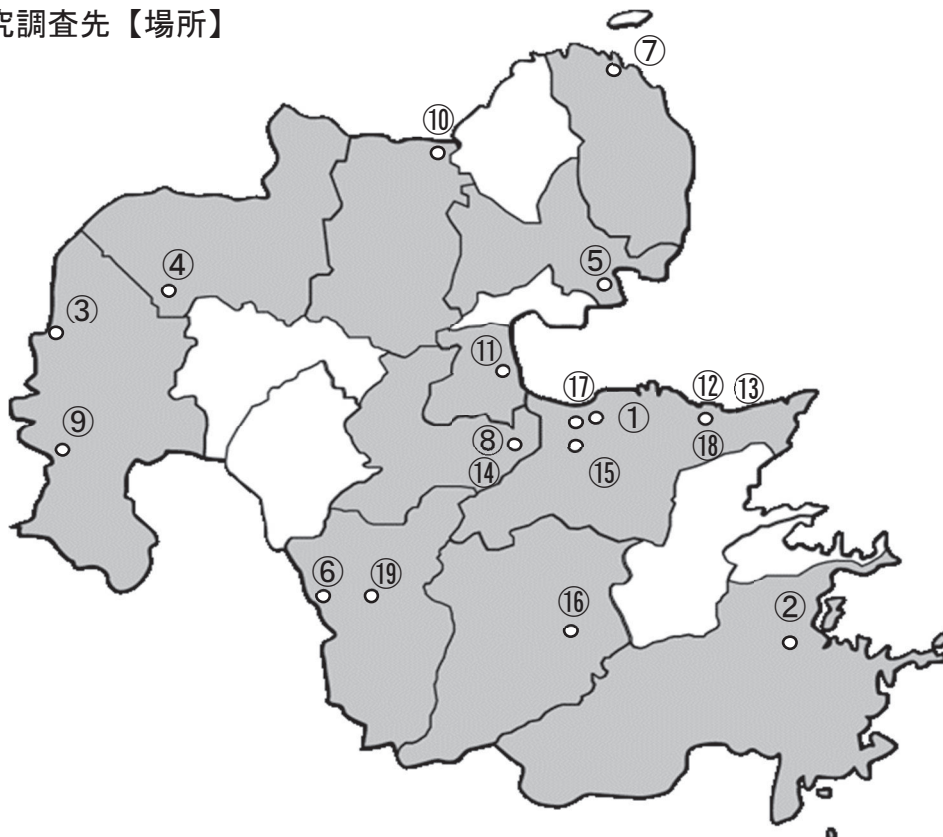
### 見えてくるもの、これからの視点、今後の施策に向けて



◇ 研究調査先【一覧】

番号	分類	調査先	調査地域
①	防災	鬼塚電気工事株式会社	大分市
②		志縁や	佐伯市
③		大鶴防災士会	日田市
④	地域づくり (交流)	耶馬三溪 地域婦人会	中津市
⑤		南台地域きずなづくりの会	杵築市
⑥		久住さやか利活用実行委員会	竹田市
⑦		もやし会・だいず会	国東市
⑧		挾間興友会	由布市
⑨		日田市役所前津江振興局	日田市
⑩	地域づくり(産業)	USA☆宇佐からあげ合衆国	宇佐市
⑪	若者支援・ 子ども支援	中部中学校学校運営協議会	別府市
⑫		未来応援コミュニティ	大分市
⑬		b-room ぶるーむ	
⑭		若者活動隊	由布市
⑮		認定 NPO 法人地域の宝育成センター	大分市
⑯		しげまさ食堂	豊後大野市
⑰		大分市民図書館	大分市
⑱	高齢者支援	坂ノ市リハビリテーションセンターもみの木	大分市
⑲	生涯学習	直入町史談会	竹田市

◇ 研究調査先【場所】





## ①【防災】（主体：企業・商店）

### 事例：地域の災害時対応の取組

#### （取組の概要）

会社の業務内容を活かした災害時の避難場所を提供ならびに支援活動

#### （調査先）

名称	鬼塚電気工事株式会社
連絡先等	住所：大分市大字津留1979番地1 電話：097-569-3271 HP： <a href="https://www.onizuka.co.jp">https://www.onizuka.co.jp</a>

#### （沿革・取組の経緯）

- ・同社は1955年（昭和30年）に創立され、電気工事を主として管工事、電気通信工事、消防施設工事、IT事業など、人々の生活に根付いた業務内容となっている。
- ・同社には社会の目的と会社の活動目的は同一にすべきであるという経営方針があり、大分の地方創生となるものを日々模索していた。
- ・働き方改革や社員一人一人の個性を尊重する中で、2018年に会社のブランディングを目的とした事業を始めた。クリエイター、社員に加え、芸短大生と協議を進める中で、夕方になると街中に現れるスマホの充電難民を救う企画が浮上し、世の中の小さな困りごとを解決する活動を開始した。
- ・その先に災害時の停電による携帯電話の充電問題があり、さらに、災害そのものを防ぐ活動を検討するようになり、ZEB導入に至った。
- ・ZEB導入による社屋の建て替え時に、津波避難ビルとして防災協定を市とも締結している。



#### （背景・課題）

民間企業として、会社の活動目的は、自社の利益を出すことだけが目的ではなく、社会がよくなるために会社は活動するべきであるとの経営方針から、業務内容を活かした活動を考えた時、充電ステーションやWi-Fiの提供が提案され、その続きとして、災害という言葉が浮かび上がり、ZEB、津波避難ビルへと広がっていった。

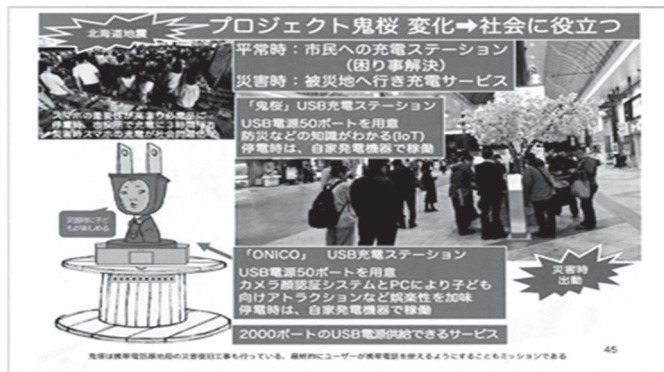
(組織・体制)

会社組織の一部に専門の部門があるのではなく、全社員をあげて取り組んでいる。



(活動の実際)

- ・2018年からガレリア竹町広場に無料充電ステーション(50ポートUSB、フリーWi-Fi等:平常時)を設置。非常時用キットも開発。
- ・2022年完成の社屋へ、地域住民も参加した避難訓練を毎年実施。
- ・ZEB(エネルギー・ゼロ・ビル)で、脱炭素に日々貢献している。



(成果・課題・まとめ)

- ・無料充電ステーションは、高校生を始め、不特定多数の方々の利用があり、情報発信収集のアイテムとなるスマホの充電環境に不安がなくなった。
- ・非常時用キットは、整備しているだけでなく、能登半島地震災害支援へも参加している。
- ・津波避難ビルであることは、地域住民にとって、非常に大きな安心となり、また、定期的に行っている避難訓練では、地域コミュニティの再確認の場となっている。
- ・ZEBでは、電気料金を旧社屋の60%にまで抑えることに成功した。

(調査活動を通して)

当初、会社アピールのための充電ステーションや、地域に開かれた津波避難ビルのイメージであったが、その元には災害時への対応があり、さらに奥には災害そのもの、地球の温暖化による災害への対応があった。大きな問題であるが、各々が自分のできるところから取り組むことが、「ウェルビーイングの向上」に繋がることを考え直すよい機会となった。

また、あらためて、地域社会を見直すと、そこかしこに落ちている小さな困りに、それに精通する人・企業が少し解決するだけで、大きな「地域社会の幸せ」につながると実感した。

(調査者:山崎 佐和子)

## ②【防災】（主体：民間団体・NPO）

事例：復興サポート食堂「志縁や」代表 柴田真佑 氏の取組

（取組の概要）

柴田真佑（しばた しんすけ）氏は、民間による食育・防災の拠点として復興サポート食堂「志縁や」を設立・運営し、食を通じて「生き抜く備え」を学ぶ場作りを行っている。地域の担い手となる「命を守り・命を大切に人づくり」を目指し、食育・防災・被災地支援活動を実践している。

（調査先）

名称	「志縁や」代表 柴田真佑 氏
連絡先等	住所：〒876-0112 大分県佐伯市弥生大字上小倉948-1 電話：090-8415-0492 Mail：ss43214321@gmail.com

（沿革・取組の経緯）（背景・課題）

柴田氏は以前佐伯市役所の職員として防災・「食の町づくり条例」・「食育推進会議条例」・「佐伯オーガニック憲章」の制定作業等を行う傍ら、公務とは別に防災活動にも取り組んだ。2017年9月に、自身も台風18号の局地的豪雨によって被災しながら救出活動を行った。これらの体験から、行政の動きとは別に、地元の安全な場所に民間の小回りのきく防災時の拠点を兼ねた食育の場が必要という思いが生まれた。2020年3月末をもって、市役所を早期退職し、コミュニティ食堂「志縁や」を立ち上げた。現在は、復興サポート食堂とし、その営業利益は、公的事業に還元し「営公の架け橋」として、まず「民」が先行モデルをつくり「公」がそれを応援する「官民協働」の実現を目指している。



「志縁や」柴田氏

（組織・体制）

復興サポート食堂「志縁や」は、柴田氏に人々が気軽に相談ができる窓口となっている。これまで食育や被災地支援事業などを手がけてきた柴田氏の仲間が集まったボランティアグループ「暮らしつなぎ隊」や「食育サポートおおいた」が、講演会や食育事業等の運営や被災地支援活動を大分県内にとどまらず全国に出かけて行っている。

（活動の実際）

◇食育活動～食べることは生きること～

- ①子どもが作る「弁当の日」の普及活動・・・映画「弁当の日～『めんどくさい』は幸せへの近道」の出演・上映や講演活動を行う。
- ②巣立つ君たちへの自炊塾・・・卒業前の高校3年生を対象に、地元産の食材を使い出汁の取り方や



ご飯の炊き方など自炊の基本を学ぶ体験教室。旅立つ日の夕食か朝食を家族のために作ることが宿題で、日々支えてくれた家族への感謝とふるさと佐伯への思いを深める。

- ③オーガニック食材の普及・・・「志縁や」で有機食品販売を行い、オーガニック食材を使う困難さを自ら調査しながら普及啓発活動を行っている。

◇防災・被災地支援活動～生き延びる術と避難後の新たな生き延び方～

- ①被災地支援・・・東日本大震災、熊本地震、各地の豪雨災害等の被災地に出向き炊き出しや、がれきの撤去、傾聴ボランティア等の活動を行う。令和6年1月の能登半島地震では、現地に赴き水脈を確保する支援、能登チャリティ上映会による緊急支援や被災地農家の野菜販売支援等を行っている。



- ②地域の防災活動・・・講演会、地元佐伯市弥生地域の台風18号による被害を写真やパネルで紹介、地元小学生による防災カルタの作成、学校の避難訓練の視察及び講評など、子どもたちや地域住民に防災教育を行う。



- ③民間による防災拠点・・・コミュニティ食堂「志縁や」を向かいにある道の駅「やよい」と連動させ、災害時の炊き出し救援活動の拠点となるよう災害への備えを行っている。

(成果・課題・まとめ)

「持続可能な活動であるために、予算とプランニングが重要である。」柴田氏の言葉である。そのノウハウを柴田氏は惜しげもなく訪ねてきた人に伝えてくれる。

「志縁や」のベンチで、柴田氏に悩みを相談する。柴田氏本人がその場に出向いて講演や活動の手助けをするだけでなく、柴田氏の持つネットワークにより、予算や詳しい人物の紹介など、やりたい活動を実現するための方法も相談に乗ってくれる。「志縁や」は、訪ねてきた人の背中を押してくれる役割をしている。そのことにより、自分自身が学ぶ、自分も役に立つことができる、社会に貢献できるという自信と喜びを感じさせてくれる。



人と人をつなぎ、地域の力を高め、次世代を担う人材を育成することに大きく貢献している。

(調査活動を通して)

柴田氏の活動は、まさに「志」が「縁」となって協力者や支援の輪が広がり、草の根的に広がっていることが活動の強さであると思う。災害時には「自助・共助・公助」と言うが柴田氏は「近助(近所)」による協働が大切であり、日頃から「垣根」を取り払うことが必要であるという。事実柴田氏の「志縁や」は大人から子どもまで寄りつきやすい安心感がそこにある。

「誰かのために生きている。誰かのためにできることをしたい。それが、自分自身を整えてくれる」という柴田氏の生き方や考え方、そして行動力は、近助による安心して暮らせる地域社会を実現させるものであると感じた。

(調査者:森脇郷子)

### ③【防災】（主体：民間団体・NPO）

#### 事例：大鶴防災士会の「ぼうさいキャンプ」での取組

##### （取組の概要）

大鶴防災士会は、H29年7月九州北部豪雨で甚大な被害を受けた日田市大鶴地区で、令和元年に設立された地域の為に防災・減災に取り組む団体である。大鶴地区にある大鶴振興協議会や日田市大鶴公民館と連携し、大鶴地区内では防災パトロールや防災講演会、ぼうさいキャンプに取り組み、地区外でも九州北部豪雨での経験を伝える講演を実施している。

ぼうさいキャンプでは、地域の大人が地域の子ども（中学3年生）に対して九州北部豪雨での経験や防災・減災について教えている。

##### （調査先）

名 称	大鶴防災士会
-----	--------

##### （沿革・取組の経緯）

九州北部豪雨を経験後、大鶴地区の7自治会で防災士の資格の取得を勧め、令和元年度に防災士の資格を有する者16名で設立された団体が「大鶴防災士会」である。会員は令和6年5月時点で31名となっている。

設立当初の取り組みは防災情報の発信（大鶴公民館の公民館だよりに掲載）、防災士の研修等への参加、防災講演会（大鶴公民館と共催）、九州北部豪雨の経験を活かした他地域での講演を行い、現在は防災士会を立ち上げようとしている他自治会で防災士会の役割について講演するなど活動に広がりを見せている。

このような活動の中で、ぼうさいキャンプは令和3年10月に日田市大鶴公民館にて公民館事業として開始された。きっかけは、日田市大鶴公民館が地域の課題として地域の子どもに対しての防災・減災教育が行われていないことを、大鶴防災士会の藤井隆幸会長に相談したことからであった。令和3年度はコロナ禍でもあり、公民館での宿泊は出来なかったため「ぼうさいデイキャンプ」としたが、令和4年度からは大鶴公民館で宿泊し、地域の大人から防災の知識を学ぶだけでなく、仲間や地域の大人と寝食を共にし交流できる場としている。

##### （背景・課題）

大鶴地区では人命を落とすような災害に遭ったにもかかわらず子どもたちへの防災教育が行われていなかった。子どもたちは高校に進学すると日田市内の学校にバス等で通学することになり、一気に活動の範囲が広がる中で、防災教育を受けずに社会に出て行くことに課題を感じた大鶴公民館の呼びかけにより、中学校3年生を対象とした「ぼうさいキャンプ」に取り組むこととなった。公民館職員は職場の異動により代わることがあるが、大鶴防災士会（地域の方）に主体的に関わってもらうことで地域の思いや課題を取り入れながら活動が続けられると考えている。

(組織・体制)

ぼうさいキャンプを取り組むにあたっては、大鶴防災士会、日田市立大明小中学校、日田市大明中学校育友会、日田市大鶴公民館が連携し開催している。

大鶴防災士会と日田市大鶴公民館は企画・運営、日田市立大明小中学校は対象の中学校3年生の参加しやすい日程の調整、参加の募集チラシの配布・回収を担っている。ぼうさいキャンプ開催期間中には日田市立大明小中学校の中学校部の校長・教頭も事業に参加するなど、地域で行われる子どもたちへの素晴らしい活動であると理解し協力をしてきている。

(活動の実際)

日田市大鶴公民館の主催事業として行われているが、活動するにあたり計画から当日の活動まで大鶴防災士会に関わってもらわなければ成り立たない事業である。

【開催日】 金曜日の放課後～土曜日の午後まで（日田市大鶴公民館に1泊2日）

【開催場所】 日田市大鶴公民館

【参加者】 日田市大明小中学校9年生（中学校3年生）希望者

【3年間でやってきたプログラム】

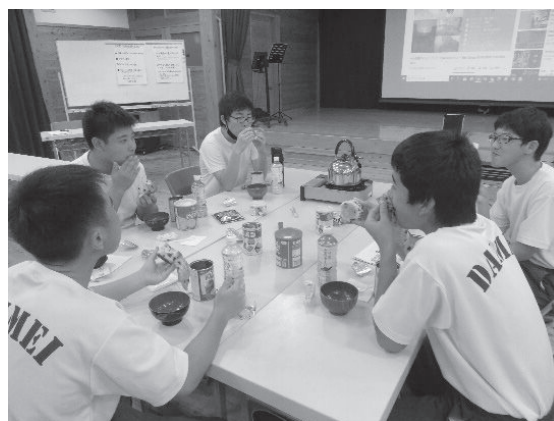
- ・避難所体験 ・防災講演 ・非常食体験 ・防災ゲーム ・災害伝言ダイヤル体験
- ・マイタイムライン作成 ・防災標語作り ・救急救命講習 ・地震体験車ユレルンダー

金曜日の放課後に災害が起きたという想定で、中学3年生の参加者は大鶴防災士会の方と一緒に学校から日田市大鶴公民館まで移動し、道のりに設置された災害モニュメントを見学し当時の災害を振り返り、公民館では実際の避難所と同じ受付、非常食の体験、段ボールベッドに寝るなど避難所の体験ができるように計画をしている。

プログラムとしては、大鶴防災士会の役員が九州北部豪雨の被害や避難の経験、自分の命を守ることの大切さなどを伝える講演を行い、大鶴地区で起こった災害を教える時間を毎年設け、地域の大人が地域の子どもに教える活動を重視している。保護者や地域住民が何らかの形で「ぼうさいキャンプ」に関われるように、令和3年度は「災害伝言ダイヤル171」の体験日を利用して家庭と連絡を取り、令和5年度は地震を体験できる車「ユレルンダー」を大分県に依頼し、保護者や地域の方に体験してもらっている。また、寝食をともにすることで仲間との思い出作りや地域の大人と顔見知りになることで地域の安心安全にもつながることを期待している。



【 ぼうさいカードゲーム 】



【 非常食体験 】



(成果・課題・まとめ)

令和3年度の事業実施後のアンケートから、「中学生が防災について学ぼうとしている姿を見て自分たちももっと頑張らないといけない」という意見が大鶴防災士会の方からあり、子どもたちに関わることで大鶴防災士会の活動にも影響を与えていることが分かった。また保護者の意見では、「子どもと参加したことで家族で防災について考える良い機会になった」、「災害伝言ダイヤル17171を利用するのは初めてで、こういう機会を作れて良かった」という意見があり、プログラムを工夫することで家庭でも防災について考える機会になっていることも分かった。しかし、「中学生の参加者が少ない」との意見もあり、大鶴防災士会にとっても少しでも多くの子どもたちに参加してもらった方が教え甲斐もあり、意欲にもつながると思われ、今後の工夫が問われる。

しかし、このように大鶴防災士会が地域の子どもに対して頑張っている姿を公民館だより等で発信し、誰かに必要とされていることや、人に喜んでもらえたことを感じることで大鶴防災士会の活動のやりがいにつながっている。



【 防災士会による防災講演 】

(調査活動を通して)

「私たちはあの日何が起こったのか、忘れてはならない。伝えなければならない。そして風化させてはならない。この地域で共に暮らす人々の未来を繋げるためにも。」という言葉は大鶴防災士会の藤井隆幸会長が大鶴公民館だより(令和2年6月号)に掲載したものだ。この言葉の思いを、ぼうさいキャンプを通じて地域の中で繋いでいく事が大切だと感じている。

時が経っても地域の方が中心となり、過去の災害の経験や反省を未来に繋げることは災害に強いまちづくりにつながり、地域の大人が頑張っている姿を子どもたちに見せることで、子どもたちが大人になったときに地域で活躍してくれるような人材となることを願っている。公民館職員としては、このような活動が繋がっていくように地域に寄り添い、地域の方や団体の活動に伴走し、支え盛り上げていくことが役割だと感じる。

(調査者:高尾 徳昭)



## ④ 【地域づくり(交流)】 (主体:社会教育関係団体)

事例:中津市山国町地域婦人団体連合会の取組

(取組の概要)

中津市山国町地域婦人団体連合会は「心の通うあう地域づくり」を目指し地域を担う女性を育成し地域活動の充実、発展させる取り組みを推進している。しかし、人口減少社会の到来や地域婦人会活動を支える婦人会員の減少により活動存続の難しい状況である。そのため、地域住民に対し婦人会の活動を紹介しその必要性を理解してもらうことにより会員の入会を促し、地域にとってかけがえのない新たな婦人会活動を展開している。

(調査先)

名称	中津市山国町地域婦人団体連合会
連絡先等	住所:中津市山国町守実130 (一財)コアやまくに

(背景・課題)

概要参照

(組織・体制)

R5 年度収入:(会費 55,080 円※540 円×102 名、補助金 269,000 円、事業収入 720,609 円)  
会員:102名  
役員:会長、副会長、庶務・広報部、教育研修部、福祉・環境部  
能登半島地震の義援金:山国婦人会 182 名、150,823 円→大分県婦連から震災地へ

(活動の実際)

令和6年度の重点目標:組織の充実と活動の推進  
(広報部)  
○組織の拡大の取組 ○地域におけるリーダーの育成 ○広報活動  
(教育研修部)  
○男女共同参画社会の確立に向けた活動推進 ○地域で協働した青少年健全育成の推進  
○家庭教育の充実  
(福祉・環境部)  
○地域福祉対策の推進 ○安全で健全な食生活の推進 ○介助の必要な人の支援の在り方  
○減災、防災への取組 ○OSDGs の推進(地球温暖化への取組)

(成果・課題・まとめ)

○里カフェの経営・運営の成果は、特に評価されるべき活動だと思う。令和元年度からワンコイン食堂(500円)として昼食を一年中、提供している。中でも山国の豪雨災害時は、裏庭からも土砂が流れ自分の食事どころではない状況下であっても里カフェからボランティアの・地域の方へ50食、町内へ130枚、無料券を配布したそうだ。現在は地域の方、移動販売のお惣菜の提供や観光客など地産地の食材をフル活用したランチを楽しみに来ている。



この活動のすごみは、5つのグループで構成され各チームがリーダー中心にその日のメニューを決めて11時30分から14時まで提供していること。グループに共通していることは朝一番にすることが「だしとり」「炊飯準備」。もちろん衛生管理等は当たり前。メニューはこの地域で育てた「旬」ものを使用。コア山国の施設は四季を体感できる広いスペースなのでゆっくりランチを食することができる。この運営でスタッフには1時間200円で5時間分が支給され、カフェがあることは、このスペースが地域の方のよりどころであり、情報の共有と交流の場になっていることが成果の1つである。



○環境保全の活動は、プラスチックごみの減量に取り組み、小学校、地域住民アンケート調査、プラスチックごみの分類と食品トレイの回収などを行い、会議と研修は19回開催したと報告がある。ごみを出すことは「ダメ」と、ゴミ出しの用の透明で厚いビニール袋を業者と協働してつくり、その袋に名前を記入することを提案している。この袋は中津市も取り入れたと伺った。また、平成元年には廃油を活用するための機械を行政へ要望し100万の機械を購入してもらい廃油を集め、粉石けんなどを作り販売している。これは事業収入にもつながっている。

○事業収入を捻出することは婦人会では大変難しいことだが重要なことだと思う。会員の方のやりがいにつながり、継続することの意義を皆さんが実感していることが次世代へ必ず引き継がれると思った。

○「会員にもっと楽しんでもらうために見える活動、楽しむ活動を行うための「レクレーション係」を組織の体制に位置づけことが課題です」と会長から伺った。



(調査活動を通して)

山国地域婦人会が小規模だからできる活動ではなく地域に関わる方を巻き込むことができるか。社会教育・社会活動はここにあり、まだまだできることがあると元気をもらいました。

(調査者:安達 美和子)

## ⑤【地域づくり（交流）】（主体：民間団体・NPO）

事例：「食を核とした地域交流の場」南台地域きずなづくりの会の取組

（取組の概要）

南台地域きずなづくりの会は、高齢化が進行する中で、高齢者が住み慣れた町で安心して暮らしていけるように、地域のみなさんのコミュニケーションを深め、心の通い合うネットワーク作りを目的に、毎月1回「和ッショイ食堂」（現在は「和ッショイカフェ」）を開催し、食事をとりながら誕生会や特技披露、レクリエーションなどを通して住民同士の交流を行っている。毎回30～35名が参加している。

（調査先）

名称	南台地域きずなづくりの会（現代表：池永 路子 氏）
連絡先等	住所：大分県杵築市南杵築368番地 電話：0978-62-3402

（沿革・取組の経緯）

- 平成16年「フレンドの会」結成。住民同士の交流がほしいとの願いから、女性だけのサロン活動を始め。60歳以上の女性、会費100円、場所：個人宅・施設見学、内容：親睦、学習。
- 平成28年「フレンドの会」から「南台地域きずなづくりの会」へ名称変更。「食」を核とした地域交流の場「和ッショイ食堂」を始め。立ち上げにあたり、杵築市社会福祉協議会、隣保館、市社会福祉課、区長、小学校長と連携。
- 令和6年「和ッショイ食堂」から「和ッショイカフェ」へ名称・活動内容を変更。

（背景・課題）

- ・平成16年、子育てが終わり、仕事も退職し、地域に根をおろして生活を始めたとき、地域住民間の交流が少ないことに課題を感じた発起人が、子育て当時、子ども会活動をともに行っていたメンバーと課題を共有。サロン活動として地域の女性が集う「フレンドの会」を結成し、14年間活動する。その中で、高齢になり一人での生活となった方々の孤独感、生活意欲の低下（食事を作りたくない、外に出たくない、何もしたくない）を何とかしたいという思いから「食」を核としたコミュニティーづくりが発案される。そのことを契機にサロン活動から地域きずなづくりへと活動が拡大される。
- ・会の名称を「南台地域きずなづくりの会」とし、2つの目標を設定。
  - ① 地域のネットワークづくりを確かなものにし、この地域で暮らす人たちが世代を超えて交流ができ、安心して楽しく暮らせるようにしたい。
  - ② 地区民の顔や声が身近に感じられ、「南台に住んでよかった」と言える笑顔と出会いたい。そして、今日まで「世代を超えて集える交流の拠点（居場所づくり）」「食を核としたコミュニティーづくり」に取り組んでいる。

（組織・体制）

- ・地域きずなづくりの会スタッフ：代表、事務局、会計、料理、広報、渉外 等 16名  
※結成当初12人のスタッフ。その後、世代交代をしながら現在に至っている。
- ・活動費 参加費：300円、 補助金：赤い羽根共同募金から2万円（年額）

(活動の実際)

- ① 「和ッショイカフェ」 開催日 月1回: 第4日曜日 10時~11時30分 場所: 杵築市隣保館等
  - ・季節感のある茶菓子、装飾、生花(スタッフがわかるようにエプロン、三角巾を着用)
  - ・誕生日会(毎回) 誕生日を迎えた方が一言スピーチ、全員でバースデーソングを歌唱
  - ・交流レクリエーション 歌、踊り、紙芝居、ゲーム 等
  - ・季節行事(随時) 花見、クリスマス会 等
- ② 準備等 事前打ち合わせ会・事後反省会の開催: メニュー、交流内容の検討・決定、改善点 等
- ③ 広報活動 「和ッショイ食堂・カフェ」通信を発行→開催日のお知らせ、活動内容の紹介  
※班回覧の活用 → 南台西区・東区の区長さんが出欠確認を実施
- ④ 送迎サポート活動 自力で会場まで来ることが難しい方には近くのスタッフが連絡を取り送迎

(成果・課題・まとめ)

【成果】

・初代代表阿部俊子さんの言葉「地域のおばさんたちでよくここまでやれたなあ、私たちの地域力すごい。同じ目的へ、スタッフ一人一人が持てる力を出し合い、活動できるこの人間関係ができたことは南台地区の宝だと思う。そして、目的達成の喜びは、共有感を高めこれからの活動の原動力となると信じている。自助、共助・公助という言葉があるがその中に「地助」という言葉を入れ、住みよい地域を区民の地域力で創っていきたい。やがて来るという人生100年時代に向かって・・・!」

・活動を支えてきた目的①住民どうしのきずな(ネットワーク)づくり②孤立化予防と心身の健康増進③運営者・参加者それぞれの生きがいづくりが20年間という活動の中で達成されている。

【課題】~知恵を出し合い、やりたいことを やれる方法で~

・サロン、食堂と地域活動も20年近くなるとスタッフも高齢となり、世代交代が一番の課題である。若い人たちに呼びかけ、今は40代2名、50代5名の若手が入っている。しかし、働いているため時間の確保が難しい。そこで食堂からカフェへ変更し、短時間でも地区民が集まってコミュニケーションが取れる方法を考え取り組み始めている。

【まとめ】

地域のコミュニティーづくり、笑顔あふれる地域づくり、それは人と人がつながることで始まる。この思いを大切に、今後も焦らず、スタッフも参加者も同じ方向を向いて進めるように考えていきたい。この素晴らしいこの地区のコミュニティーを継続していけるように。

(調査活動を通して)

**「あなたのお顔が見たくって あなたとお話したくって あなたと仲良くなりたくて この食堂ができました」** ~和ッショイ食堂・カフェのスローガン~

なんて素敵な言葉なのだろうと思います。やりたいことを無理なく、みんなで知恵を絞って、楽しみながらを大切に、20年の活動を紡いでいることに感動します。そこには、互恵性があり、千変万化する力があり、だからこそ地域の人と人を結ぶ活動となっているのだと思いました。

そして、スタッフのみならず、参加者一人一人の強みがいかにされることで、存在意義を感じる活動内容に地域社会のウェルビーイングが実現されていると実感しました。

インタビューを受けてくださった方々のはじける笑顔・エネルギッシュな表情が目には焼き付いています。

(調査者:衛藤 恭子)



## ⑥ 【地域づくり（交流）】 （主体：民間団体・NPO）


事例：「久住さやか」利活用による地域活性化の取組

（取組の概要）

竹田市の北の玄関口にあたる場所にある、竹田市所管施設「久住さやか」を地域住民が中心となり、様々な形で活用することにより、集い、交流できる場としている。

また、市民ギャラリーとしての活用や久住を中心とした地域の魅力（自然や伝統文化）を発信しながら、文化的交流の場としても活用している。

（調査先）

名称	「久住さやか」利活用実行委員会	
連絡先等	住所：竹田市久住町大字久住2387-1 【「ギャラリー楓の木」内】 電話：090-4518-4261 代表 志賀幸男 HP：なし	 <p>「久住さやか」 利活用実行委員会 フェイスブック二次元コード</p>

（沿革・取組の経緯）

2018年度 竹田市久住支所より「久住さやか」利活用依頼 実行委員会結成  
2019年度～コレクション展・ランチバイキング&音楽ライブ開催  
2020年度 絵画・写真展 ウォーキング大会、久住小学校との郷土の歴史学習会開催  
2021年度～継続して実施中  
2023年度 久住中学校跡地利活用検討委員会へ代表者参加

（背景・課題）

- ・これまで十分に活用されていなかった市所有施設の活用方法の参考事例がなく、手探りの状況で活動を続けてきた。
- ・施設の老朽化に伴い、環境整備が追いつかない
- ・所管している市への要望に対して、期待する対応や改善がなされない。
- ・隣接する施設の指定管理者との関係が難しく、活動への理解や協力が得られにくい。
- ・会員の増加が見込まれず、会員の高齢化もあり、一人一人の負担が大きくなってきており、活動を継続していくことの困難さを感じている。

（組織・体制）

会員 6名  
月1回 実行委員会を開催（意見交換、計画立案）

(活動の実際)

- ・施設や建物周辺の環境整備
- ・絵画等の作品の展示  
(地域の方々の制作した作品やコレクション、美術品等)
- ・地域の歴史研究と地元小学校との学習連携・交流  
「頌徳祭(しょうとくさい)」
- ・地域の自然観察会、ウォーキングの企画・実施
- ・音楽イベントの企画、地域の方々への参加要請



(成果・課題・まとめ)

- ・地域の自然や文化の体験活動を行う中で、竹田地域や大分県内の方々には久住の魅力を発信することが出来、「久住さやか」が交流の場として一定の認知をされたと思われる。
- ・「久住さやか」での展示会を通じて、地域にゆかりのある絵画や写真等を市民の方に鑑賞してもらう機会が提供でき、地域愛の醸成に役立ったのではないかと考える。
- ・地域の活性化を目指して様々な取り組みにチャレンジしてきたが、施設の利活用について、相談できる機関や場・参考事例等を専門家のアドバイスを受けることが出来ず、素人考えで進めていっているのが課題。
- ・「郷土料理研修」「地域文化・歴史研修」等、今後の活動に繋がる取組が出来、また情報発信により多くの方と交流、そして会員のスキルアップになったことは大きな成果と考える。
- ・今後も出来る限り(からだの続く限り)、地域に根差し、地域を愛する活動に邁進したい。

(調査活動を通して)

行政が手に負えなくなった施設の利活用について、地域住民自らが会を興し主体的に活動されていることに強い地域愛を感じた。全国的に学校統廃合や自治体施設の空き施設の増加が問題視されており、地域まかせにするのではなく、行政はこの増加する空き施設をどのように活かしていきたいのか「本気度」を出せる自治体が生き残っていくのではないかと強く感じた。

(調査者: 足立 達哉)

## ⑦【地域づくり（交流）】（主体：民間団体・NPO）

事例：もやし会・だいず会の取組

（取組の概要）

人口減少や少子高齢化、学校の統廃合などが進む国東市国見町。過疎化が深刻な課題となっている町に暮らす「もやし会」の子ども達は、イベントへの参画や空き家調査に主体的に関わることで、地域の現状を目の当たりにした。意見を出し合い、市長に提案したアイデアの一つが公園づくり。無ければ自分たちで作ろうと、クラウドファンディングで資金を募り、地域の協力を得ながら、自ら遊具を手作りした公園を完成させた。地域の大人から知恵という栄養をもらいつつ、様々な活動を通して地域のにぎわい作りに一役買っている。

（調査先）

名称	もやし会・だいず会
連絡先等	住所：国東市国見町岐部 電話：0978-83-0321 インスタグラム：moyashikai

（沿革・取組の経緯）

【令和2年】

《 地域の高齢者支え合い組織が開催する「日曜カフェ」に参加 》

平日開催していたカフェの利用者低迷により、日曜カフェを企画する際子どもたちに出店依頼があり行事に参加。来場者100名を超える。

【令和3年】

《 空き家調査実施 》

地域の高齢者支え合い組織が受託した空き家全戸調査事業を地元の中学1年生10名に依頼。約1年かけて国東市熊毛地区（6区）の全空き家143戸を現地調査し、調査結果と提案書をまとめる。地域の区長などに報告・提案のプレゼンをし、その後国東市長にも同じプレゼンを行う。提案の1つに公園作りを盛り込む。

《 海岸清掃や1日カフェ開催 》

地域の海岸6か所を定期的に清掃

【令和4年】

《 「もやし会」「だいず会」を正式に発足 》

地域施設のオープニングイベントに出店するにあたり、会の名前を決定。正式に会を発足する。駄菓子屋の店名は「もやし堂」に決まる。

（背景・課題）

子どもたちが住んでいる国東市国見町は、鉄道も高速道路も通っていない過疎地域。一方で自然災害が少なく気候は温暖で採れる作物も豊富。そしてなにより人々が温かい。都会的なものは何もないが「豊かな暮らし」のために必要なものは何でも揃っている。そんな地域で暮らす中学生たちが中心メンバーとなって地域や市長に提案したのが「公園づくり」。子育ての環境として「公園」は必要と、自分た



ちの経験・思いから提案をした。だが、そう簡単には公園の予算はとってもらえない。「自分たちも公園が欲しかったがなかった。それなら後輩たちのために作ろう。おじいちゃん、おばあちゃんたちも立ち寄って交流が生まれる公園にしよう」と動き始めた。

《 公園の活用目的 》

- ・親子で集える場所づくり ・子どもが遊び集える場所づくり
- ・イベントなどを開き地域の人と交流する場 ・未就学児を持つ親たちの集まりの場
- ・家族連れ移住希望者にとって子どもを育てる環境として利点

《 どのような公園にするか 》 ・たくさんの人が集まりやすく ・遊具を自分たちで作る

《 課題 》 ・場所 ・資金

(組織・体制)

【もやし会】

- ・国東市内の高校生までの子どもなら誰でも入れる子どもの会
- ・現在の会員数は小学校1年生から高校2年生まで計13名
- ・入会費500円／人を資金源にスタート
- ★もやし会議:会員のうち、小学校5年生以上の希望者。イベントの企画、運営、会計を行う。  
入会費1,000円

【だいず会】

- ・もやし会をバックアップする団体で、もやし会の保護者で構成
- ・クラウドファンディング支援金の管理など
- ★ネーミングの由来:大豆(大人)から栄養(知恵)をもらい、土(地域)に根差し、太陽の光(愛情)を浴びながらすくすく成長していく。一本では料理にならなくても、たくさん集まればご馳走になる。

(活動の実際)

【地域からの仕事】

- ・空き家調査実施
- ・地域の高齢者支え合い組織から横断幕のデザイン及び製作を受注
- ・NPO法人が運営する施設内に設置する案山子製作

【イベントへの参加】

- ・地域の高齢者支え合い組織が開催したイベントに駄菓子屋出店
- ・地域のNPO法人が運営する施設のイベントでお化け屋敷、射的、駄菓子屋など出店
- ・市主催のグルメイベントに駄菓子屋出店
- ・他地域のイベントからの依頼により駄菓子屋出店

【自主イベントの企画、開催】

- ・こどもの日祭り、夏祭り、ハロウィンイベント主催
- ・地域の海岸6か所を定期的に清掃

【その他】

- ・「清川町支え合いのまちづくりシンポジウム」で活動を発表
- ・厚生労働省「地域共生社会の実現に向けて」の冊子に事例掲載

## ★出店資金

お小遣いから出し合った入会費を資金に駄菓子を仕入れ、原価計算・店舗デザイン・看板の製作・チラシ作成・宣伝・会場設営・イベント終了後の収支計算まで全て自分たちで行う。その利益を次のイベントの資金に充てる。増えた資金は拠点作りのために貯める。

## 【もやし公園作り】

### ・令和4年クラウドファンディング開始

地域のNPO法人が運営する施設内にある市の土地を公園に利用できるようになった。

資金作りのためクラウドファンディングを立ち上げる。

### ・令和5年1月クラウドファンディング終了

約250万円の支援が集まる。

### ・令和5年4月公園作り開始

大工さんら地域の方の協力を得ながら、もやし会の子どもたちが手作りで遊具（ツリーハウス・滑り台・ブランコ・平均台・高齢者向け足つば歩行道）を製作。大工さんに東屋の製作を依頼。

### ・令和5年8月

公園完成。お披露目イベントを開催し、数百名が来場。



## （成果・課題・まとめ）

### 《成果》

#### ○子どもたちにとって…

- ・子どもたちが自主的に計画、企画、運営することで学校ではできない様々な経験の場となる。（仕事、商売、折衝、組織の維持、運営、人間関係など）
- ・地域で主体的に動き、関わることで初めて地域を知る。意識、視点が変わる。

#### ○地域にとって…

- ・過疎高齢化した地域において、子どもたちが貴重な人材として地域活性、維持に機能する。
- ・文化（お祭り、知恵）の伝承の担い手としてなくてはならない存在。

### 《課題》

#### ○担い手の減少

- ・子どもも大人も減少する一方 ・告知、周知手段がない ・移動手段がない
- ・意識の違い（地域の意識） ・危機感が薄い ・諦めている

## （調査活動を通して）

この調査を通じて素晴らしい子どもたち、親たちと出会うことができた。公園を作ったり、イベントを企画したりして地域を盛り上げる活動を行うなかで、もやし会の子どもたちは、今や地域になくてはならない存在となっていると感じた。

印象的だったのは、子どもたちの夢を後押しする親たちの姿だった。私が訪問した日は、2家庭の親子を長時間取材することができたが、何気ない会話の中に子どもたちに対する深い愛情を感じた。子どもをじっくり聞く姿、将来の生き方にも繋がる助言や言葉かけを聞きながら、こんな親に導かれ後押しされて、この活動をやり遂げることができたのだと確信した。

（調査者：萱島 かよ）

## ⑧ 【地域づくり（交流）】 （主体：民間団体・NPO）

### 事例：挾間興友会の取組

#### （取組の概要）

自分が住む町を活性化させるための取組みを基本理念として、委員発動の下で様々なイベントや行事に取り組んでいる。

自分ではなく、地元（挾間町（大きくは由布市））の未来永劫の発展を願い活動を行う。

#### （調査先）

名称	挾間興友会
連絡先等	住所：〒879-5518 大分県由布市挾間町北方77 電話：097-586-3878（写真のヒラオカ イオン店（事務局）） FB： <a href="https://www.facebook.com/profile.php?id=100064754374430&amp;locale=ja_JP">https://www.facebook.com/profile.php?id=100064754374430&amp;locale=ja_JP</a>

#### （沿革・取組の経緯）

- ・旧町時代のまちづくり協議会から派生し、自主的に集まったのが最初。
- ・挾間町のために何かできないかと模索しながら、挾間町を自主的に紹介する企画などを会員と共に会話しながら取り組んできた。
- ・最近では町内商業施設とコラボし、コロナ禍で絶えていた盆踊りを復活し、そのステージで地域の子どもたちの出番を創出するなど、地元に着した企画を精力的に実施している。
- ・コロナ前に運航していた『親子で巡る企業見学バスツアー』をこの春休みに復活させた。

#### （背景・課題）

市外からの流入人口の増大により、挾間町の良い所を知らないままに育っていく子どもが増えている。良い思い出がある事で、故郷へ帰ろうとする望郷の念が生まれるはず。この事を実践することで一極集中による、旧郡部の人口減少による疲弊を緩和する事が出来るのでないか。

我が町の良い所を発信する事で、交流人口の増大につながり、地元商業者（小売り・飲食など）の収益を増やし、地元の活性化にも寄与できると考えている。

子どもたちに、地元にある仕事を保護者と一緒に見学する事で、将来の職業選択時に地元を選んで貰えるのではないか。人口減少の歯止めの一手となると考え、親子で巡るバスツアーを学校の長期休暇の時に実施している。

外国人技能実習生をお招きし、コミュニティーを形成する一人であることを自覚して貰うと共に、ここ日本（由布市挾間町）での楽しい思い出を作る事で、仕事先や友達だけの付き合いの輪を広げる事が出来ないかと考えている。母国へ帰り、日本の大分県の由布市の挾間町の良さを、楽しい思い出と共に地元でお話して貰いたいと願っている。

## (組織・体制)

挾間町を愛する地元出身の地元で働く方々(電気店/写真店/リフォーム業/保険代理店)、画家兼教師、町内で働く方々(各銀行の支店長・イオン挾間店店長・地元企業からの代表者)、観光協会長、市役所職員、公民館職員、子育て支援員、地元議員、県議など。

バラエティ豊かな面々で構成され、地元の隠れた名店の紹介なども行いながら、地元の活性化の一助となるべく取り組んでいる。

## (活動の実際)

### 【国際交流】

地域に居る外国人技能実習生を招き、BBQにて双方の得意料理を披露して歓談した。その後、隣町のお祭りに一緒に行き、彼らに山車を引くお手伝いをして貰ったことは、本人たちにも良い思い出となっている。

### 【地元の紹介】

「はさまっぷ」と題したフェイスブックアカウントを持ち、この中で地域を紹介している。また、主催した地域内の座談会を公開している。

### 【親子で巡る企業見学バスツアー】

この春休みに久しぶりに実施。この企画は、地元にある企業を親子で巡り、そこでの仕事を感じて貰い、その事を親子で語ってもらいたいとの思いから実施しているが、実は地元にある仕事に親子で触れて貰う事で、将来的な職業選択の一候補に繋げて貰いたいとの思いがある。この春からは、隣町の庄内町にも協力を求め、挾間と庄内の2地域で実施した。参加者からは、大好評で次回も参加したいとの声が多かった。

### 【町内商業施設とのコラボ】

イオン挾間店に協力を願い、店舗駐車場にて盆踊り祭りを実施した。コロナ禍で絶えていた町民総踊り盆踊り大会を主たる企画者として実施し、このステージで地元の子供たちの発表会を催すなど、地元密着の地元が主役の祭りを実施した。また、イオン挾間店では20周年祭/25周年祭のステージイベントを企画し、出演団体との出演交渉から当日の裏方を務め、地域の皆様に活躍する姿を披露して頂けたと、誇らしげに教えてくれた。

### 【座談会/意見交換会】

過去に挾間興友会メンバー/地域で働く若者/地域で新規就農した方々との意見交換会をフェイスブック「はさまっぷ」で公開した。ここでも地域に焦点をあて、(抱えている問題点・若者の考え方・地域産業の一つである農業への取り組み)を地域の方々に知って貰い、交流の場にできればと考えて実施している。現在、「10年後の由布市は?庄内は?由布院は?挾間は?」と題して、由布市長をお迎えした挾間興友会メンバーとの座談会を順次公開している。また次は同じテーマのシンポジウムを、公民館のホールで予定している。

### 【地域ボランティア】

小中学校の通学路を中心に、長期休暇明けに道路清掃(ゴミ拾い)を実施している。子どもたちの目に大人たちの不手際(ポイ捨てゴミ)を見せたくない。生徒たちの通学路を清潔に保つために汚れ

を除いてあげたいとの思いで実施している。年々、ゴミが減り、また同じように活動して下さる方もおり、地域全体で同様の動きとなる事を期待している。

(成果・課題・まとめ)

人が集まる場所を創出する事で、その場所に集まる人々それぞれに活躍の場所と、鍛えた技を披露する場所ができ、その場所に参会する全ての人々に笑顔が見られることが理解出来た。人は、人の前で鍛えた技を披露すること、それを見て貰える事、そして拍手を貰える事で、更にその技に磨きをかけようとするものだ。正方向のスパイラルが上手く作動している。

その様な機会を、様々に企画立案している行動力の源泉は、やはり一人ひとりの仲間たちが互いに認め合い、助け合っているからではないかと感じる。

今後も、求められるからではなく、自分たちが求めていくことで、先導的な動きが加速していくのではないかを感じる。

その動きを、その場所に集う様々な方々に上手く伝搬できれば、地域力の活性化につながるように感じる。課題としては、その事を如何に相手に伝えられるかだと思う。

兎にも角にも、昔は町中に居たおせっかい焼のおじさんとおばさんが復活して、それを嫌がらない世間が戻ってくれればと思う。

それは難しいのかもしれないが、人と人がしっかりと繋がり、相手の事を考えて行動できる人が増えることこそが、次代の幸せに繋がるのではないだろうか。

その様な未来を想像させてくれる挟間興友会の皆さんに期待して、拍手を送ります。

(調査活動を通して)

強烈なリーダーシップを持つ一人が頑張れば、様々な事が出来るように思うが、反面その人が居なければ何もできない事にもつながるので、この団体のように緩やかな協力体制の下で、一人ひとりが主役となる得る活動は、永続的につながっていけないのではないかを感じる。

またその中に参加する事で、自分もその一人としてどのように動けばよいのかが自然と身につくのではないかと思う。

(調査者:枝木 東海)



## ⑨【地域づくり（交流）】（主体：行政・公共施設）

事例：前津江振興局が団体支援することによる地域魅力化に資する取組

（取組の概要）

日田市前津江町において、地域住民による地域の魅力を発掘し、その良さを広報するためのイベントづくりを行うグループがある。また前津江振興局ではそのようなグループに対し、地域振興を目的とした事業を委託し、地域づくりや担い手育成を進めている。その主なグループとして「やませみ」「天空の里 あかいしゆかいくらぶ」があり、他地域からの転入者の力も借りながら、にぎわいのあるまちづくりを日常的に進めている。

（調査先）

名 称	やませみ
連絡先等	住所：日田市前津江町大野2192 電話：050-8885-3212 フェイスブック： <a href="https://www.facebook.com/ikoi.no.mori.yamasemi/">https://www.facebook.com/ikoi.no.mori.yamasemi/</a>
名 称	天空の里 あかいしゆかいくらぶ
連絡先等	住所：日田市前津江町赤石948-29 電話：0978-53-2812 フェイスブック： <a href="https://www.facebook.com/groups/1126573694051573/">https://www.facebook.com/groups/1126573694051573/</a>

（沿革・取組の経緯）

「やませみ」

◇会員数：10名 ◇参加資格：前津江にゆかりがあるもの ◇会費等：なし

◇団体発足年月日：令和2年6月30日

令和2年(2020年)に前津江町内の有志が集まり、前津江町の活性化を目的に立ち上げた団体。店舗では、定食やコーヒーなどの飲食物を提供しており、その他にも日本ミツバチの巣箱作り、炭焼き、米作り、小豆作りなど、様々な取り組みを行っている。また、会員のほとんどが農業経験者であり、種の販売や堆肥の販売なども行っており、講習会を通して農業を振興している。令和4年(2022年)からは日田市からの依頼を受け、野菜を自力で出荷することができない高齢生産者のため、地域内の野菜集出荷業務を担っており、新たな集荷体制の構築を進めている。

「天空の里 あかいしゆかいくらぶ」

◇会員数：22名 ◇参加資格：日田地区に居住し活動に興味を示す者 ◇会費等：年2,000円/世帯

◇団体発足年月日：平成28年6月4日

日田市前津江町には豊かな自然、昔から伝わる生活の知恵、私たち住人というたくさんの資源があ

る。そんな資源の豊さを内外に発信し、前津江町のよいところを知ってもらいたいという思いから、「天空の里・あかいしゆかいくらぶ」を設立した。赤石地区等、標高の高い前津江町からの景色の素晴らしさをみんなで大事にしながら、苦楽をともに分かち合い、いつまでも末永くこの町で生きていきたいという思いを込めた名称である。

#### (背景・課題)

前津江町地区(人口807人、面積78.99km<sup>2</sup>、高齢化率52.1%/R6.5.3|現在)は平成17年度の市町村合併により日田市の一地域となった。少子高齢化は一層進行し、昭和30年と比べると人口は75%減少し、地域の活力が失われつつある。そのため次世代に対し地域の自然・文化・コミュニティーなどの良さを伝え、地域の担い手として人材育成をする必要に迫られている。また、地域の主な産業は農業であるが、小規模多品種栽培であることから出荷時は少量のものを遠隔地(大山農協まで片道15km)まで運ばねばならず採算がとれないなど立地条件もよくない。このようなことから環境再生型農業、高付加価値製品の製品開発等により地域が自立して維持できる枠組み作りが求められている。

#### (組織・体制)

「やませみ」

代表者「中島健司」氏(町内大野出身)ほか会員(10名)

「憩いの杜 やませみ」(店舗[飲食店、弁当・地域物産販売]兼事務所)が活動拠点

「天空の里 あかいしゆかいくらぶ」

代表者「中島伸子」氏(町内赤石出身)ほか会員(22名)

会員をはじめ、自治会、公民館関係者、考古学同好会が活動内容に応じて集い活動の主体者となる。

各種イベントを開いた際には日田市や他県近隣住民が50名以上集まり交流をすることも多い。

#### (活動の実際)

「やませみ」

活動内容

□前津江町の環境整備

他団体と協力し前津江町の環境整備事業を行う。前津江地域の活性化を目的としたお店、「憩いの杜やませみ」を運営する。憩いの杜やませみは以下の取り組みを行う。

##### ① 加工の場づくり

かつて赤石で製造されていた「かりんとう」を復活させ、町内外で販売する。また、前津江の特産品を生かした商品を開発し、前津江町のPRを行う。

##### ② 憩いの場づくり

気軽に町民が訪れることができる憩いの場を提供する。





### ③ 販売の場づくり

前津江町民が育てた野菜や花、前津江町民が作ったアクセサリーなどの物品を販売し、前津江内外の人が前津江の物を買うことができる場とし、地域内経済を発展させる。



### ④ 情報集約の場づくり

観光情報を集約し、町外の人に観光情報を提供する。また、人材情報を集約し、前津江町民の活躍の場を増やす。

「天空の里 あかいしゆかいくらぶ」

#### ① 「いいとこ探し」

川津食品社長の川津峰之氏に講師をお願いして、ゆかいくらぶ会員8名と日田考古学同好会から4名、そして大野の吉田さんも参加され、川津食品赤石工場内にある展示室（前津江埋蔵文化財センター）を見学した。



その後、赤石老松神社から少し登った大宮司で縄文時代に使われたと思われるヤジリを発見！そして柳田遺跡では弥生時代と思われる土器の破片を見つけ、その後、米山遺跡に移動して縄文時代の生活を想像。

遺跡の条件として、水があり日当たり良好の平らな土地が必要であることが分かった。展示室の見学や遺跡を巡ることで、考古学の勉強が出来た。

#### ② ゆかいくらぶ通信

グループ発足後から「あかいしゆかいくらぶ」の取り組みを広報誌にまとめ前津江町の全戸へ配布している。この広報の目的は町のよさの「見える化」であり、町民に気づかれていない自然、歴史、先哲、文化財などを紹介することにある。2か月に一度の発行ペースで現在第32号まで発刊している。町民にとっても地域を知る貴重な情報源となっている。

#### ③ 赤石再発見ウォーク

秋晴れの下、紅葉が始まった景色を楽しみながら、前津江町赤石地区の曾家集落を歩いて黒曜石を目指した。黒曜石については渡邊信孝さんからの説明の後、日田考古学同好会の原田勝宏さんからもお話を伺った。行きには山の神様を、帰りには曾家神社や観音様を訪問し、綾垣新市さんから説明をお聞きし、初めて聞くお話も多く、遠い古に思いを馳せながら、ワクワクする時間を過ごすことができた。ゴール地点ではやませみさんによる美味しいおにぎりや豚汁が待っていて、食事をとりながらの交流会では参加者全員の自己紹介が行われた。



(成果・課題・まとめ)

2グループとも地域住民が集い、自分たちが住んでいるこの前津江の良さを次の世代に繋げたいという強い思いで活動をしている。振興局もこのような思いをもつグループに寄り添い、委託事業等を通じて負担感を感じることなくグループの意欲を喚起する支援を継続して行っている。しかし若年層の流入人口を増やさなければこの取り組みの継続は難しい。今日国内最大手のキャンピングメーカーがこの前津江町にキャンプ場を開設し交流人口を徐々に増やしている。このような機会を行政がコーディネートしながら、地域の魅力を高め外部へ発信し続けること、そしてグループに対してはICTツールの活用や集落支援員等の積極的な派遣による活動支援をととして、新たな街づくりへの機運づくりができることを期待したい。

(調査活動を通して)

前津江町には以前から「子褒め条例」があり地域で子供たちをみんなで育てていこうとする土壌がある。今日では、保護者に大変人気がある「森のようちえん おひさまのはら」という特色ある自然体験活動を展開している認定外こども園があり、この園に入園したいと希望し市外から転入してくる家族も多い。それだけ地域の住民のみぞ知る地域の豊かさと住み心地の良いコミュニティーは魅力があるのだと改めて感じる事ができた。この地域ではウェルビーイングを日常的に感じる要素が多くあるが、これも前津江の先哲の知恵・努力、地域住民がこのコミュニティーを形成する際の工夫が残っているからこそであると思われる。今後、社会教育として、地域住民の学習活動を通してこの継承に資する取組ができると思われるが、このプログラムづくり、これを担う人材育成は避けて通れない。このような好事例がある前津江の地域研究を通して地域づくりのヒントを集約していくことが喫緊の課題であるように思えてならない。

(調査者:石井 圭一郎)

## ⑩【地域づくり（産業）】（主体：企業・商店）

事例：USA☆宇佐からあげ合衆国の取組

（取組の概要）

宇佐市ソウルフードの「宇佐からあげ」を通じて宇佐市の発展を目指す取り組みを行っている。  
活動テーマ：「宇佐から」世界へ  
主な活動：イベント出店、PR活動(メディア対応)、宇佐からあげの日(7/12)、宇佐からあげマップ監修

（調査先）

名称	USA☆宇佐からあげ合衆国
連絡先等	住所：〒872-0001 大分県宇佐市長洲3956-3 電話：090-4993-1345 HP： <a href="http://usakara.ext.jp/">http://usakara.ext.jp/</a>

（沿革・取組の経緯）

USA☆宇佐からあげ合衆国の取組は大きく3つの要素に分かれると感じた。

- ・地域の勝手連的な動きが地域資源の見える化へ動き出す「団体発足とマップ作成」
- ・地域の事業者との協業が始まり、活動の和が広がり、「地域経済への波及効果を実感」
- ・地域の子どもたちや他のエリアの団体との「価値観の共有」

この3つの要素に分け、沿革・取組を紹介したい。

**【ボランティア団体発足と手作り宇佐からあげマップ作成】**

2006年、宇佐市観光ブランド課職員の「そういえば、行きつけ以外のからあげは食べたことないよね」という雑談から、宇佐市のすべてのからあげ店(50店舗ほど)のからあげを制覇し、そのからあげの特徴をまとめた、手書きマップをボランティアで作成したことが活動のきっかけとなった。

輪転機で印刷し市役所内で配布したところ、行政職員を中心に大好評。メディアの目に止まり、報道されたことで、入手希望者が殺到。内容監修は引き続き団体で行い、印刷は市の観光ブランド課で行うことになる。活動当初はリクルート主導で広報したお隣の「中津からあげ」に遠く離されていた知名度も、次第に追いつき、良いライバル関係になっている。

**【事業者との協業の開始と「からあげブーム」】**

からあげ愛好家の集まりだけでは次のステップが見えないことから、2010年、地域のからあげ専門店とともに「宇佐カラアゲ協会」を設立した。からあげ専門店との関係が構築できた結果、団体単独でのグルメイベント出店時の食材の供給体制も確立。九州を中心にグルメイベントへの広報出店活動を続ける中、ついに2012年には全国のご当地グルメ組織「B-1グランプリ」への加盟も果たし、より大規

模なステージでの活動を行うようになる。

こうした広報出店活動を続けることにより、からあげ食材を提供する「専門店」と、イベント参加を手伝う「ボランティア」が生まれ、楽しみながら地域の広報活動を行う人の輪が広がっていった。

また、メディアも団体の活動を後押しした。例えば「USA☆宇佐からあげ合衆国」が、トランプ大統領就任に便乗して2017年に宇佐駅にて行った「日本のUSAで大統領就任を祝う会」は全国放送のTVのワイドショーなどメディアに広く取り上げられた。このようなメディアを使った「宇佐ブランド」の広報活動と、全国的に起こった「ご当地グルメブーム」が噛み合い、宇佐からあげは全国で認知されていった。また、地元からあげ専門店の全国展開も進み、当初は自社の利益のみを追いかけていたからあげ店経営者も、地元宇佐を代表しているという意識が次第に高まってきた。

こうして、ボランティアと事業者の方向性が噛み合い、まちづくり活動による地域経済の活性化事例のひとつとなった。

#### 【文化の継承と地域活動】

2013年一般社団法人日本記念日協会により7月12日が「宇佐からあげの日」に認定。宇佐市の小学校では7月12日の給食に宇佐からあげが提供されることとなる。また、「宇佐からあげの日」には市内の小学校1校を選び、給食前に団体メンバーによる「宇佐からあげ出前授業」を行い、児童に対し、地域や宇佐からあげへの愛着を植え付ける活動を行う。

2014年には、同じ志で食を活用した地域づくりを行う地域団体(北九州・別府・延岡)と連携し「東九州風土フード連盟」を設立。各市町村の「点の活動」だけでなく、「面の活動」への取り組みも行った。

#### (背景・課題)

たまたま宇佐市観光ブランド課に配属されていた4名の市職員の思いつきで始めた、ボランティアベースの地域ブランディング活動は、うまく時流をとらえ、「宇佐からあげ専門店」という宇佐の日常風景を全国ブランドに押し上げることとなった。

コロナ禍やからあげ専門店ブームの終焉などもあり、団体としては以前ほど大規模な活動は行っていない状況にあるものの、まだまだ「宇佐からあげ」はお隣の「中津からあげ」とともに全国で愛される食文化である。

一方、行政組織の合併により、宇佐市に新たに加わった「安心院」「院内」にも気遣いが必要となった。結果、宇佐市は4大グルメとして「すっぽん」「どじょう」「ゆず」「からあげ」を一緒に広報するようになり、情報が希薄化し消費者の心を捉えにくい状況に変化している。

また、活動開始から18年が経過し、新たな人材など取り込みなども考える時期となっている。

#### (組織・体制)

宇佐市職員有志4名の中心メンバーをベースに、出店やメディア対応など活動ニーズに合わせ宇佐市民10名ほどの有志にて活動しているまちづくり団体。

行政職員が活動の中心を担いメディアに注目されやすい取り組みも多いため、時に行政組織内に波



風を立てることもあるが、「宇佐からあげを通じて宇佐市の発展を目指す」という目標に真摯に取り組む結果を残してきている。

関連団体として「宇佐からあげ協会(からあげ専門店の団体)」があり、宇佐からあげ出店やイベント開催時のサポートを行っている。

#### (活動の実際)

##### 【グルメイベント出店広報活動】

「宇佐からあげ協会」加盟社にて下準備した食材を、グルメイベント会場(県外・県内)に持ち込み調理して有料にて提供。宇佐からあげキャラクター「うさからくん」の着ぐるみなども参加し、宇佐市観光パンフレットを配布するなど地元愛を伝えることで、ボランティアで宇佐市の広報活動を行う。移動や宿泊、食材などの経費はからあげ売上の利益でまかなう。

##### 【宇佐からあげの日】

毎年7月12日は「宇佐からあげの日」と制定されている。その日は宇佐市の全小学校+2中学校の昼食に「宇佐からあげ」のメニューが給食で提供される。その中の小学校1校を選び、小学校4年生のクラスで「宇佐からあげ授業」を行い、地域資源の良さを伝えている。今年は宇佐市立八幡小学校の予定。

##### 【からあげマップの監修】

元々は「USA☆宇佐からあげ合衆国」の手書きマップで始まった「宇佐からあげマップ」だが、近年は2年に1度ほどのペースで宇佐市観光ブランド課にて発行されている。マップの内容については、引き続き団体にて監修を続けており、全国から集まる「からあげ愛好家」には欠かせないマップになっている。(最新版は38店舗掲載)

#### (成果・課題・まとめ)

地域ブランディングや地域の持続的な発展には、地域のリソースに新たな視点で光を当てるという作業が欠かせない。また、地域活動には関係者が楽しみながら、日々新しいチャレンジを行うことも大切である。

この「USA☆宇佐からあげ合衆国」の事例は、宇佐市観光ブランド課の職員という「観光行政のプロ」が、個人のボランティア活動として地域資源のブランディングを行ったものである。

宇佐の日常の食文化である「からあげ専門店」が全国的に見て珍しいこと、知名度で勝る「中津からあげ」は宇佐のお店が中津に進出したことにルーツがあること…という、何気ない地域の食文化＝リソースの素晴らしさを知ることから始まっている。

そんな地域のリソースに光を当て、楽しみながら事業者やボランティアを仲間に引き入れながら、地域プライドの造成と地域経済の活性化に寄与したこの活動は、地域の活性化において参考にすべき事例である。地域のウェルビーイングに寄与するという社会教育の視点においても参考になるのではないだろうか。

(調査活動を通して)

この活動は、前項でも紹介したように、観光行政のプロによる個人ボランティア活動により展開されているという特徴があり、その分野の知識や情報、そして人脈を持つ地域人材が、仕事としては実現が難しいジャンルの地域活性化を、プライベートで行い結果を出したという点が肝となっている。

ヒアリングの中でも「市役所職員の立場では(平等性の観点から)できない取り組みだが、一市民として関わることで『からあげ』というテーマ一本に絞って打ち出せることが面白いし、わかりやすい活動ができる」「市民としての立場ならガンガン行ける」と日常業務では出来ないトライ&エラーを行う楽しさを語っていたのが印象的だった。

地域の持続的発展には、地域の活性化が欠かせない。

地域の活性化には、地域の既存のリソースの価値を高める活動(経済価値を高める活動)を持続的に行う必要がある。

地域における最大の既存のリソースは、様々な価値を創出し、経済活動をしている「人」である。そんな「価値を創出している人」に、「地域の人」がリスペクトし、光を当て、「価値を認め合う」活動が、地域の活性化の原点となると考える。

「楽しみながら人に光を当てる活動」が地域に自発的に生まれ、その活動に専門知識や情報を持った人がサポートする流れが起き、経済活動が活性化する。そんな事例が次々に起こる地域が「ウェルビーイングな地域」と言えるのではないかと感じた。

社会教育におけるウェルビーイングを考える上で、「安心安全の地域づくり」という足元固めの活動は非常に大切である。一方で、将来、より多くの人たちに自分たちの地域を選んでもらうための、既存リソースを磨き育てる「地域ブランディングの活動」もまた大切だと思う。

コンサルティングファームのEY Japanの最近の調査で、現在地域に関わりのある活動を行っていないZ世代のうち1/3程度が、何らかの地域活動に参加し、地域の人との関わりを持ちたいと回答したという調査結果があった。こうした、「地域に関わりを持ちたいニーズ」に応えられる基盤(プラットフォーム)を、それぞれの地域で構築するという仕組みづくりも、社会教育という範疇の中で求められているのかもしれない。

行政の効率化から広域の地域経営を行うようになり、小学校区などの小さな単位での地域経営を担う機関が地域にはなくなったように感じる。小学校区や地域公民館などの社会基盤を活用した社会教育が、「USA☆宇佐からあげ合衆国」の事例のように、地域リソースを磨きくことで経済を動かし、地域への愛着を育てるような動きを生み出す機能を持てると良いなと思った。

(調査者:門脇 邦明)

## ⑪【若者支援・子ども支援】 (主体：民間団体・NPO)

事例：中部中学校における中部子ども応援プロジェクトについての取組

(取組の概要)

中部中学校では、社会に開かれた教育課程の実現のため、学校運営協議会の中に地域学校協働本部を置き、中部子ども応援プロジェクト事業として、地域の人々を巻き込んで数々の取組を展開している。

(調査先)

名称	中部中学校地域学校協働本部
連絡先等	住所：別府市東荘園4丁目1番25号

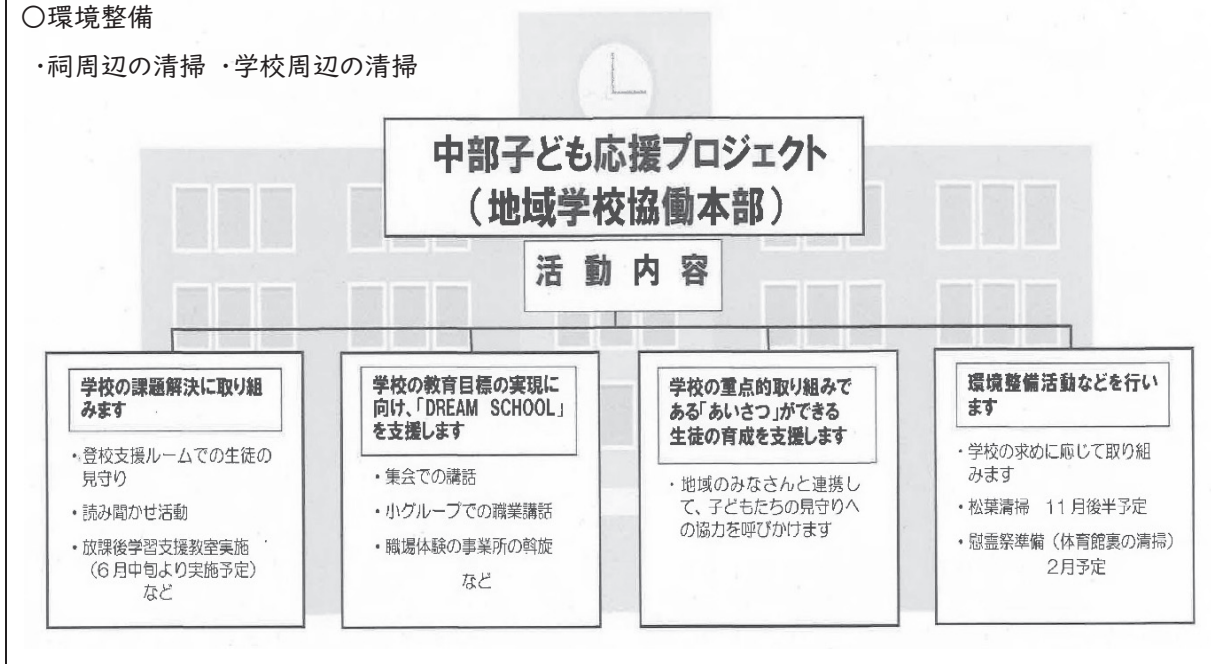
(沿革・取組の経緯)

生徒に不登校が目立ってきた2021年に、その生徒たちの居場所づくりとして、学校運営協議会の15名のメンバーでスタート。

現在、このプロジェクトには地域の約90名の賛同者が参加をしている。

(活動内容)

- 学びの居場所づくりとして
  - ・登校支援ルーム・放課後学習教室・読み聞かせ
- キャリア教育支援として
  - ・挨拶運動・職場体験・職業や生き方講話
- 環境整備
  - ・祠周辺の清掃・学校周辺の清掃





(活動の実際)

令和6年度 中部中学校「DREAM SCHOOL」(中部子ども応援プロジェクト支援) ゲストティーチャー授業計画表(案)									
月	5月	6月	7月	8月	10月	11月	12月	2月	3月
学校の教育目標	<b>教育目標「夢をもち、自ら学び続ける生徒の育成」</b> <b>ドリームスクール「地域の先生」による授業</b>								
一年	全成一体に夢向け学校D教育S(学標年達) テーマ I'm possible GT 笹原廣喜さん(車いすランナー) 大分国際車イスマラソン優勝 北京パラリンピックマラソン銀メダル	テーマ 夢をもちつというこ GT 西岡津世志さん		平和学習	テーマ 思春期の心 GT 田中生弥子さん	学年全体の少人数での地域とつながるドリームスクール(自治会長や民生委員)(20人程度のGT生徒7名) ~主体的対話的な授業~	ガチンコスクールデイ 全校単位の少人数職業講話(30名のGT生徒12名)	テーマ 職業人に学ぼう 少人数グループの職業講話(6つの職種に分けてのGT生徒20人程度)	テーマ 高校の仕組みを知ろう GT 関孝彦さん
二年		マナー講座 職場体験学習に向けて GT 岩田友美子さん	学年全体の少人数グループでの職場体験学習 ~訪問型ドリームスクール主体的体験的な授業~	平和学習	テーマ ボランティアとしての生き方 GT 尾島 春夫さん		ガチンコスクールデイ 全校単位の少人数職業講話(30名のGT生徒12名)	別府温泉まつりに携わっている人の講話 GT 別府温泉まつり関係者	
三年	全成一体に夢向け学校D教育S(学標年達)	テーマ 人として生きるうえで大切なこと GT 徳田靖之弁護士	学年全体の少人数グループのドリームスクール(20人程度のGT生徒7名) ~主体的対話的な授業~	平和学習	テーマ 命の大切さ 獣医師として GT 神田 岳委さん		ガチンコスクールデイ 全校単位の少人数職業講話(30名のGT生徒12名)	テーマ 東日本大震災を忘れない GT 勢井 由美子さん(シンガーソングライター)	

(成果・課題・まとめ)

地域と学校の接点が増えることにより、まず地域住民が中学生とふれ合う機会が多くなり笑顔が増え、地域の将来を真剣に考えるようになった。

生徒たちは大人たちから多様な価値観や社会の仕組みを直接聞くことができ、18歳成人の時代において必要な考え方を学んでいる。

また、地域に関心を持つ生徒が増え、地域活性の一助となっている。

(調査活動を通して)

この中部中学校の取り組みは、今後の社会教育やPTAの新しいモデルになると感じます。自治会やPTA活動は少子化や地域の教育力の低下などで大きな曲がり角にさしかかっていますが、次の社会教育の組織形態のヒントがあると思います。

PTAで言えば、PTCAやPTCCAと言われる地域や企業が参画する社会教育の組織形態です。厳しい環境の時こそシンプルな考え方が重要です。即ち、子どもたちの役に立てるか、喜んでもらえるからです。そういった観点からも素晴らしい取り組みだと感じました。

(調査者:和田 俊二)

## ⑫【若者支援・子ども支援】（主体：民間団体・NPO）

### 事例：未来応援コミュニティb-roomの取組

#### （取組の概要）

「大分市若者応援条例」の基本理念に沿い、高校生が地域で活躍できる場所や機会の創出に取り組んでいる。坂ノ市周辺に在住の有志7名によって構成している。

平日は放課後、高校生が安心して自由に過ごす事のできるスペースの提供や、土日、祝祭日は、ボランティア活動、体験活動、高校生向けの講座を行っている。

また、地域や企業と連携した企画も行っている。

高校生にとって、地域がもっと輝ける場所になるようにと、高校生の未来を応援している。

#### （調査先）

名称	未来応援コミュニティb-room（ぶるーむ）
連絡先等	住所：大分市坂ノ市南2丁目4-1 電話：090-9654-7655 HP： <a href="https://b-room.jimdosite.com/">https://b-room.jimdosite.com/</a>

#### （沿革・取組の経緯）

b-room代表の佐藤淳子さんが、まずは自分の子どもが、高校生になったころから公民館の利用が減り、地域との繋がりが、希薄化しているのを感じた。元々公民館で主事をしてきた佐藤さんは、その仕事を辞め、高校生の居場所づくりや、地域とつなぐための活躍を知り合いの有志7名で始めた。

#### （背景・課題）

- ・活動を始めたころは、高校生の共感を得ることが難しかった。
- ・活動が軌道に乗り始め、高校生にワークを通じて自身の自己啓発に努めていたが、支援する大人のスキルアップが現在の課題である。
- ・外の向けてのメリットを発出することが難しい。活動に参加した高校生や、その高校生に関わった大人は地域と関わる事の大切さを感じる事ができるが、その素晴らしさをなかなか伝えることができない。また、その機会がなかなか無いことが課題である。

#### （組織・体制）

- ・7名（ママ友等）で構成し、大分東高校の生徒を対象とした活動を展開している。
- ・公民館や地域の方々、また地域の団体、近隣の小学校、中学校とも連携し高校生の活躍の場を提供している。

#### (活動の実際)

- 大分東高校の校長、教頭、主幹教諭と連携して生徒達に呼びかけ、お知らせを行う。高校の掲示コーナーや廊下、教室にもポスター掲示をし、生徒への周知に努めている。
- 高校の授業に入らせてもらい、福岡県からインストラクターを呼び、スポーツ鬼ごっこを行った。生徒は楽しく大変喜び、体力づくりにもつながった。
- 近隣の小学校の育成クラブへ生徒と出向き、小学生との触れ合いの場を提供。美容師を目指す生徒は児童のヘアメイクをしてあげたり、保育士を目指す生徒は子どもとのふれあい方を学ぶ場になったりしている。児童も大変喜び、生徒達が来てくれるのを心待ちにしている。
- 生徒を連れ、無人駅の調査をした。無人駅ではどんな困りがあるのか、またどのようなサポートが必要か、自分たちに何ができるのかを考えるよききっかけとなった。2024年4月6日,4月7日にコンパルホールで行われた演劇「無人駅ホームな人々」の開催の際には、コンパルホールロビーにて「無人駅探訪写真展」の掲示、レイアウトを高校生が行った。
- 愛媛県で活動する高校生ボランティア達とZOOMで交流し、昨年度は実際、愛媛県まで行きワークを通じて交流した。

#### (成果・課題・まとめ)

高校生の居場所づくり、地域との繋がりを目指して活動していく中で、高校生の主体性が育ってきている、自分で決めて動く、自己決定感や幸福感に繋がっているのを感じる。

ボランティア活動を通じて、多くの生徒たちが価値観に変化を持ち、人に喜ばれることに喜びを感じ、そこから自分の夢を見出した生徒もいる。

そんな生徒達と関わる支援者、また地域の方々も元気が湧き、希望を感じている。

学校から出ても地域の大人が見守っていてくれる、悩みや不安を聞いてくれる大人がいる、自分たちの「やってみたい」を叶えてくれる大人が身近にいることは、これから大人になっていく子どもにとって大変心強く、成長に繋がっている。

#### (調査活動を通して)

インタビューを通してまず感じたことは、支援者の佐藤さんがとてもやる気と愛情に満ちていたという事で、こんな大人が近くにいる子どもたちは、とても幸せであると感じた。

子どもたちの変化、成長を感じそれに喜びを感じている佐藤さんと話しているだけで自分もやる気と元気が満ちてくるのを感じた。

学校 家庭 地域、三位一体での子育ての大切さ、素晴らしさを痛感した。

(調査者:平本 泉)

## ⑬【若者支援・子ども支援】（主体：民間団体・NPO）

事例：未来応援コミュニティb-roomぶるーむの取組

（取組の概要）

- ・高校生のサードプレイス（放課後、自由に過ごせる場所）
- ・高校生向け講座（体験活動・ボランティア活動・地域との交流）
- ・文化芸術に触れる体験、地域活性化等

（調査先）

名称	未来応援コミュニティb-roomぶるーむ
連絡先等	住所：大分市坂ノ市南2丁目4-1 電話：090-9654-7655 HP： <a href="https://b-room.jimdosite.com/">https://b-room.jimdosite.com/</a>

（沿革・取組の経緯）

高校生の第三の居場所を創りたいという想いをを持った6名の様々な立場の大人が立ち上がる。  
その思いが通じ、街の仏壇店の一部屋を借りる事が出来て高校生のためのフリースペースが出来た。（家庭・学校ではない自由な第三の居場所）  
その他にも書籍を活用したワークショップや高校生向け講座を展開してそれを地域の子どもたちへの「絵本の読み聞かせボランティア」に繋げている。  
また、地域資源を活用した自然体験活動なども行っている。

（背景・課題）

高校生の保護者の立場で考えた佐藤代表、「この子は学校と家庭外に居場所がないのかもしれない」と。それならば、自分で創ると立ち上がった。  
また、地域の大人目線を持った仲間たちが増え、保護者・地域の大人双方の願い「高校生が輝き花咲かせることのできる場所」を実現。  
多くの高校生が利用するようになる。  
高校生たちは居場所と共に自分を輝かせることのできる場所を手に入れ多くの体験をしている。

（組織・体制）

発起人：佐藤代表（保護者目線で立ち上げ・地域の祭り等にも参画）  
本のプロフェッショナル・読み聞かせのプロフェッショナル・助産師・農業のプロフェッショナル・ママ友のメンバーで構成されている。  
また、拠点は活動に深い理解をいただいている萱嶋仏壇店の一室を借用。  
多様な人材と様々な想いが一つになって運営されている。

(活動の実際)

- ・居場所の確保(週3回スタッフが常駐) ・高校生講座(読み聞かせワークショップ)
- ・体験(ボランティア活動) ・イベント参画(地元の祭りに参加等) ・交流(県外の高校生との交流)
- ◆ボランティア活動
  - ・演劇ホールでの会場準備、受付 ・坂ノ市公民館主催子ども向け「運動あそび」教室
  - ・地元萬弘寺の市(祭り)でのごみ拾い等の参画
- ◆高校生向け講座
  - ・キャリア教育「自分の進路のを見つけ方」 ・性教育 ・職場体験(第一次産業)
- ◆高校生自主企画
  - ・子どもたちへの体験活動(ヘアアレンジ・運動教室・読み聞かせ・学童保育・遊び教室)
- ◆社会参画
  - ・大分市議会議員との意見交換会(若者応援条例)
- ◆交流活動
  - ・県外高校生(愛媛県) ・大学生協働プロジェクト(地域の公園をつくろう)

(成果・課題・まとめ)

高校生のために何かしたいと思う支援者がそれぞれのポテンシャルを活かし活動する。それは大人自身も大きな学びを得ると共に、自己肯定感や自己効力感・自己有用感を得る良い機会になっている。その後ろ姿を見た若者(主に高校生)は家庭とも学校とも異なる第三の居場所で繋がりを得て将来の希望と自己実現できる場所として認知し、活動を発展させることが出来ている。また、その両者の姿を目撃した地域住民は「自分にもできる事はないか」と参画するようになるという縮図は素晴らしい一言に尽きる。この小さな取り組みが地域社会の大きなムーブメントになる事は、本来地域社会が持っていた相互扶助・多様性・共生のポテンシャルを呼び起こすことになるかと確信する。また同時にこのコミュニティで育てられた若者は、地域社会で教育に参画するという原体験をもとに、このような活動をサスティナブルなものにする一員として大人へとなる。とても意義深い取り組みであった。

課題としては、考察において述べるものとする。

(調査活動を通して)

本取り組みの魅力は先ほど述べたが、この団体がここまで輝ける要因の一つに「適度なゆるさ」があると感じる。活動する団体を運営する際は規範と方針を明確に柱とする事が定石であるが、時にそれが足かせになる事が少なくない。設立当初の趣旨に当てはまらないモノは取り組み辛いという様になることが良い例である。しかし、本団体では高校生の多様な興味に追随するように活動を展開する事で興味関心を促し肯定し挑戦する事で価値あるものに変えている。これは何かに興味を持った若者に対して大人がそれに興味を持ち価値あるモノへと変化させているといえる。他方、課題であるが「適度なゆるさ」は外野(非参加者)にとってみれば「不安・怪しさ」等につながるものともいえる。そこで我々の様なパブリックな立場での評価がその「不安・怪しさ」を取り除く一因になれる。いわゆる質的支援としてこの様な取り組みを高評価し広く地域社会に知らしめる事が重要であり、新しい仲間を生み出し持続可能な地域力として発展させることが出来ると感じた。

(調査者:高見 大介)



## ⑭【若者支援・子ども支援】 (主体：民間団体・NPO)

事例：由布市挾間町から繋がろう!元気&笑顔「若者活動隊」の取組

(取組の概要)

\*地域活性化、ふるさとを自然に愛する子どもたちに育ちたい!  
年代10代後半～30代前後の若者世代を中心に、地域に密着し、ボランティア活動を行っている団体

(調査先)

名称	「若者活動隊」代表：渡邊愛理さん(旧姓 園田)26歳
連絡先等	住所：由布市挾間町向原487 電話：097-583-4277

(沿革・取組の経緯)

【渡邊さんの話より】

私は3世代同居の家庭で育ち、幼少の頃から自治区行事や地域参加が当たり前の感覚で過ごしてきました。

それはとても楽しい思い出としてある意味、勉強よりも記憶が鮮明に残っています。

大学時代、ずっと住んでいる由布市のために若者世代にも何かできることがあるのでは?と思い始め、活動をスタートしました。始めは、思いはあるものの実際にどう活動したらよいのか悩みましたが、まず地元の状況、今の課題や動きを知るために、数名の若者と由布市長をはじめ県議会議員さん、市議会議員さん、行政職員さん、地域の方々にお声かけをして「語り合う会」を開催しました。この会では、幅広い世代の考えを聴ける機会となり一歩ずつ始めることの大切さを改めて実感しました。

その後は、地元の由布高校の生徒さんや、由布市在住の社会人、大学生たちにも声をかけ、地域への思いを持ってきている若手が意外と多くいることを知り、メンバーも増え始め嬉しかったです。

有志メンバー20名前後で、「若者活動隊」と名付けてスタートしました。

当初はこちらからの投げかけで、活動を探し声かけしていましたが、現在では由布市の団体やイベント、祭り企画等からもお声かけをもらうようになり、ブースの出店や、由布学のクイズをして子どもたちが自然に由布市に住みたい、この土地で働きたくなるような活動も取り入れて頑張っています。

(背景・課題)

\*現状の課題は2点

①予算

ボランティア活動は、やる気と行動力があればできる良き活動だが、実際に活動として継続するためには、やはり予算の問題がある。

## ②人員の不足

コロナ禍で活動制限の時期、メンバーに温度差がでてしまい、人員不足にも悩んだ。常に課題となっている。

働きながら、学校に通いながら、活動計画や会議を行うことが負担になることもある。

当初5名から始まり、現在、主に活動するメンバーは12名。

## (組織・体制)

\*R6年度より

若者活動隊から→代表2名をおくことになった

顧問3名→由布市長、大分県議会議員、地域代表者

## (活動の実際)

◇イオン盆踊り祭り 2023年8月19日(土)開催

若者活動隊は、「由布市クイズラリー」を開催。由布学から、由布市のついでクイズを出題。

正解者には、くじ引きをひいてもらい、景品をプレゼントした。参加者プレゼントも準備した。

・「盆踊り祭り準備委員会」に、若者活動隊から代表1名が参加。

イベントの企画などに携わらせていただいた。

◇はさま きちよくれ祭り 2023年11月11日(土)開催【3年ぶりの開催】

「スライム作り」のブースを出店。企画委員会にも参加。

・きちよくれ祭り企画委員会に、若者活動隊から4名が参加。

・企画委員会として、ステージイベントや抽選会などの発案にも携わらせていただいた。

・ステージイベントでは、子どもを対象とした「空き缶タワー」を実施。

◇挾間小学校 門松作りのお手伝い(親父の会 主催) 2023年12月23日(土)開催

昨年に引き続き、親父の会が主催する門松作りに参加させていただいた。

◇挾間小学校 草刈り作業(親父の会 主催) 2024年5月11日(土)開催

4名が参加。

## (成果・課題・まとめ)

若者活動隊を立ち上げて、今年で7年目を迎えている。当初は人数も少なく、活動への熱量を伝えることや、メンバー集めに苦労している。

進み始めた矢先、コロナ禍で様々な事が制限されてしまい、イベントも中止ばかりで活動ができない3年間を経験している。

その制限がある中で嬉しかったことは、大きいイベントは一緒にできずとも、メンバーたちは小さい事からでもと、個々の活動意欲はそのままに地域交流をそれぞれの場所から続けていたこと。

今では、「若者活動隊にお願いしたい」とお誘い頂くことも増えてきた。若者の力を必要としてくれる方々や、場所は実は多くあるが、その場所に出会わないことが課題のひとつである。どのように発信していくか？今後どんなことが求められているのか？を、アンテナを高くしてキャッチするためには、多くの方々と実際にお会いしてお話する、これが一番だと思っている。

ICT機器は若者世代こそ多く使用し、とても便利ではあるが、実際に会うことや声のトーンを感じ、触れ合う意味が必ずあることを私たちは忘れてはならないと話している。顔を見て話したからこそわかること、感じる思いがある。だからこそ、自分たちなりの方向性が見え始めたのだと思う。

7年前に勇気を出して活動を始めて本当に良かったと思っている。活動を通じてできた仲間たち。そして支えて下さるたくさんの方々に感謝の気持ちでいっぱい。

諦めずに何かできることから行動する。若者世代なりに、由布市の今後、大分県のこれからのを考えていきたい。

【アイデアのひとつ!】(渡邊さんより)

県を動かす知事や議員さんをもっと身近に感じられるよう、大人も子どもも混ぜた幅広い世代と一緒に協議するおもしろい場が増えますように。生の声からヒントがたくさんもらえそう。

例えば「大分!なんでん言うちみよ~会」そんな面白い大分県だと選挙に行きたくなる子どもたちが自然に増えそう。楽しい大分県になるよう自分の場所からこれからも発信、行動していきます。

(調査活動を通して)

今回、渡邊さんからの話を聴いて、若者からの発案やアイデアの柔軟性、聴いているこちらもワクワクする気持ちを感じた。素直な感想を一言で言うなら、「とても嬉しかった」。

現在、地域の繋がりは希薄化が進み、地域や自治区、子育て世代の活動も減少する中、このような若い世代がいてくれること、大変心強く感じた。また、その若者のチャレンジや新たな考えを受け入れ喜んでくれる顧問や、地域の方々がいる由布市は素晴らしいと思った。この若者たちが歳を重ね、チャレンジや失敗を恐れず面白い大人が増えれば、まだまだ未来は明るいぞ!と、本気でワクワクした。

これからも、若者の活動を地域団体のひとつとして支え協力し、一緒に面白い大人でありたいと思う。

(調査者:園田 暁子)

## ⑮【若者支援・子ども支援】 (主体：民間団体・NPO)

事例：キャリア教育事業「こども屋台選手権」の取組

(取組の概要)

大分県内の小中学生が集まり、「自分たちが主役」となって、PTA保護者や地域の人と協力しながら、地元食材を使った創作料理をコンテスト方式で屋台販売を行う。メニューとレシピの作成、調理、材料の調達、原価計算、販売を子どもたち中心に行うことで、将来社会に出て必要な力を育むことを目的としている。同時にステージ企画も行い、子どもたちに音楽やダンスなどの発表の場を提供している。

(調査先)

名称	認定NPO法人地域の宝育成支援センター
連絡先等	住所：870-0846 大分市花園2丁目11番42号 HP： <a href="http://chiikinotakara.com">http://chiikinotakara.com</a>

(沿革・取組の経緯)

- ・大分の良さ、大分の魅力を子どもたちに解ってもらい、将来大分に戻って活躍しようという地元愛を子どもたちに育みたい、という思いで事業を始めた。
- ・就労体験を行うことで、子どもたちが働くことの大切さや意義を身をもって理解できるイベントでもある。大分が豊かな食文化に恵まれていることを活かして、子ども屋台という形式を考案した。



【屋台で販売する子どもたち】

(背景・課題)

- ・核家族化や少子化が進み、家庭や地域で子どもたちが力を合わせて何かを行う機会が減ってきている今の時代に、大分の子どもたちのために何かをしたい、という思いで事業を考案した。
- ・子どもたちの地元離れが進む中、子どもたちに地元に対する誇りや愛着を育むことができる体験事業ができないかと検討し、屋台事業を考えた。地元の食材を利用して調理し販売を行うことで、地元について知り、地域の人と触れ合い、家族や友人と助け合うことで、人とのつながりが生まれる。
- ・また、モノを作って売って利益を得ることの大変さを体験することで、キャリア教育にもなる。

(組織・体制)

認定NPO法人地域の宝育成支援センターの事業の一つとして「子ども屋台選手権」事業を行っている。

### (活動の実際)

- ・2013年にビーコンプラザで第1回が行われ、コロナ禍の休止を経て2023年に第8回が開催された。
- ・大分で同法人が開催した「子ども屋台選手権」をモデルに2018年には八王子市で開催された。2023年には調布、仙台、佐賀に広まり、2024年には松山市、流山市、相模原市、水戸市でも開催予定である。



- ・出場者は公募での申し込み制である。県内の小中学生6～10名(小学生5名以上、中学生3名以内)と保護者5名内で構成したチームで1屋台の運営を行う。約20チームを募集する。 【ステージでのパフォーマンス】
- ・販売はチケット方式となっており、3食分の引換券+コンテスト投票券で、1000円である。前売り券と当日券を準備している。会場内に投票所が設けられており、チケット購入者が投票できる仕組みである。
- ・優秀団体には表彰が行われる。八王子市で開催された同事業では、最優秀団体が開発したメニューが同市の学校給食にメニューとして採用されるという特典が付いた。大分市で開催された第8回選手権では、最優秀団体のメニューを市内の業者とコラボして、ふりかけとして現在開発中である。

### (成果・課題・まとめ)

屋台運営を通じて、子どもたちに社会に出て働くことを体験させることにより、その大変さや喜びを味わってもらうことができる。実際に汗を流しながら屋台で調理し、声を張り上げて販売に励む子どもたちの様子は、充実感にあふれ、眼が輝いていた。

また、メニューを地元の食材と限定しているため、自分の地元にはどんな特産品があり、どのように利用できるのかなど、身近な大人に尋ねたり調べたりしながら地域について学んでいると思う。メニュー作りを通じて郷土愛が育まれている。さらに、仲間と協力することでチームワークやリーダーシップの教育や成長につながっていると感じた。

実際にいくつか試食し、もう少しメニューに工夫の余地があるのではないかと感じた。また、過去のメニューと比べると、食材や調理が似通っているものが多い印象がある。プロのシェフによる勉強会を開催して、目新しい食材や新メニューの開発のサポートをしてもらうなど、工夫してはどうだろうか。

同事業が全国各地に発展しつつあるのは素晴らしいことだと思う。この事業がもっと県内でも周知されて、年に一度の選手権だけでなく、地域の祭りやイベントなどに屋台が招集されるようになると面白いのではないかと感じる。



【グランプリ受賞グループ】

### (調査活動を通して)

イベントとして参加した「子ども屋台選手権」であったが、子どもたちへの豊かな愛情と、細部にわたるルール作りとサポートの下に開催されていることが調査を通じて理解できた。

(調査者:植山 朋代)



## ⑩【若者支援・子ども支援】 (主体：民間団体・NPO)

### 事例：しげまさ子ども食堂の取組

#### (取組の概要)

NPO法人しげまさ子ども食堂—げんき広場—は、豊後大野市三重町内田で活動する団体である。「地域の人々や団体が、子どもを真ん中につながりあい、地域の未来を創る」を理念に掲げ、主に6つの活動(子ども食堂・学習支援・プレーパーク・ひろがるこどもプロジェクト・ぶんごおおのキラキラ広場・しげまさげんき広場)を軸に活動を展開している。

#### (調査先)

名称	NPO法人しげまさ子ども食堂(理事長:首藤義夫)
連絡先等	住所:〒879-7125 豊後大野市三重町内田4106-1(旧三重農業高校跡地) 電話:0974-22-1113 FAX:0974-22-2433 HP: <a href="https://shigemasak.com/">https://shigemasak.com/</a>

#### (沿革・取組の経緯)

しげまさ子ども食堂は、平成28(2016)年4月に設立された。その2年後に特定非営利活動法人として認証され、現在に至る。定款で定めている活動分野には、保健・医療・福祉、社会教育、文化・芸術・スポーツ、地域安全、人権平和、男女共同参画、子どもの健全育成、職業能力開発・雇用、団体支援、が挙げられ、幅広く活動している。活動のモデルとなったのは、東京都豊島区の「豊島子どもWAKUWAKUネットワーク」であり、そこに掲げられてあった「あたりまえの日常を地域の子どもたちが安心して送ることができるよう見守り支えていきたいと活動しています。」、「子どもは地域の宝、困りを抱えている家庭に地域がサポートできる包容力こそ、持続可能で子どもにやさしいまちづくりの原点になる可能性を持っています。」などの言葉に共感して、ここ豊後大野市三重町でも同じような取組をしたいと考えた。

#### (背景・課題)

豊後大野市三重町は第一次産業を基幹とするまちであったが、市外への人口流出や市内での人口移動等もあり、産業構造も変化してきた。人々の気質も徐々に都市化しているようである。人口31,343人(令和6年4月1日現在)の小さな市であるが、都市部と変わらぬ課題を抱えるようになってきている。

子どもの笑顔は、家庭においても、学校においても、地域社会においても、幸せをもたらすものである。もちろん、子どもが笑顔でいられるためには、保護者が笑顔でいられることが大切である。子どもや保護者の困りや悩みを自分事としてとらえられる地域づくりが必要であると考えている。

### (組織・体制)

NPO法人しげまさ子ども食堂は、役員・職員が11名の小さな組織である。それぞれの活動・プロジェクトの責任者を置き、そこを中心に活動を展開している。役員・職員だけでは到底回らない多彩な活動で、そこにはこれらの活動に賛同する地域のボランティアの存在が欠かせない。具体には、調理を手伝ってくれる地域の人、学習支援を手伝ってくれる地域サポーターや学生ボランティアがいる。この方々をマネジメントするのは事務局長であり、責任者である。ボランティアの方々もそれぞれにやり甲斐を見出して、積極的に参画してくれている。

### (活動の実際)

NPO法人しげまさ子ども食堂は、複数の取組を展開している。中核をなす取組は、子ども食堂であり、子どもがひとりでも気軽に来られ、無料で食事ができる場所となっている。地域サポーターが旬の野菜を寄付してくれて、それをもとに地域ボランティアがメニューを考え、料理をつくる。毎月、第2・第4土曜日の夕方に提供している。

次に、学習支援である。「学びたい」「何とかしたい」と希望する中学生を対象に無料で一人ひとりに寄り添いながら学習支援を行う。地域の学習支援サポーターや大学生ボランティアが支援に携わっている。その他に、いろいろな団体、企業、個人とつながることで、子どもたちに体験や学びの機会も提供している。毎週水曜日と金曜日の夕方に開催している。

続いて、しげまきげんき広場である。「みんなにとって居心地のいい場所」「たくさんの『好き』と出会う場所」を合言葉に、子どもたちが日常の夕方に一緒に過ごせる場の提供をしている。子どもたちは集団で時間を過ごすことで、ひとりではおぼろげになりがちな生活習慣や学習習慣の定着にも効果をもたらしている。毎週月曜日・水曜日・金曜日の放課後に施設を開放している。

その他、プレーパーク(遊びをサポート)、ひろがる子どもプロジェクト(地域が HOKORI)、ぶんどおのキラキラ広場(気軽な立ち寄り所)などを不定期に実施している。

これは筆者が令和6年5月11日(土)(取材日)に参加したプレーパークの様子である。竹を使ったけん玉や弓矢を子どもたちと一緒に作った。原理は簡単だが、慣れない手つきで難しそうに取り組んでいた子どもたちの姿が印象的であった。



### (調査活動を通して)

しげまさ子ども食堂は、SDGsの理念でもある「誰一人取り残されない社会」や「持続可能な地域づくり」のために継続的な活動を行っている。「つながり」の希薄になりつつある地域を、子どもを真ん中に関わり合える地域(大人や団体)にすることは、まさに地域の健全な姿でもあり、幸福な姿でもある。

(調査者:清國 祐二)

## ⑰【若者支援・子ども支援】（主体：行政・公共施設）

事例：大分市民図書館 読み聞かせ派遣事業の取組

（取組の概要）

大分市民図書館では、大分市立大東中学校からの依頼により、2013年から毎年生徒に向けた読み聞かせ講座を行っている。大東中学校は、3年生の学習の一環として、毎年、秋に出身小学校（明治北小・明治小・松岡小）を訪問し、交流活動を行っている。その際に行う絵本の読み聞かせの仕方を講義する講師の派遣事業である。

（調査先）

名 称	大分市民図書館
連絡先等	住所：大分市金池南1丁目5番1号（J:COMホルトホール大分内） 電話：097-576-8241 HP： <a href="https://www.library.city.oita.oita.jp">https://www.library.city.oita.oita.jp</a>

（沿革・取組の経緯）

読み聞かせ派遣事業のきっかけは、大分市立大東中学校からの依頼によるもので、2013年より毎年、大分市民図書館に「読み聞かせボランティア」として登録をしているボランティアが講師となり学校に出向いている。当初2年間は、5限目に体育館で全体講義を行っていた。しかし、当時から大規模校だった上、生徒数はさらに増えることが予想され、3年目からは、各教室での講義になった。途中、コロナの流行のため2年程中止せざるを得ない時期もあった。

（背景・課題）

わが国では、2000年を「子ども読書年」とし、子どもたちの読書活動を支援するための取り組みがなされてきた。子ども時代の読書経験は、人生を生きるための大きな力になると言われている。本離れが言われ始めて久しい。また近年、人と人との関係が希薄になってきたとも言われている。子どもが本と出合うためには、本と子どもをつなげる存在（人）が不可欠である。今の時代、その存在は親だけでなく、子どものまわりにいる大人たちの力も必要とされている。また、絵本の読み聞かせも大人が子どもに対して行うだけでなく、子ども同士、子どもが大人に読み聞かせをするなど、コミュニケーションのツールのひとつとしての取り組みにもつながっている。

（組織・体制）

公立の図書館と公立の中学校で行われている事業で、同じ教育委員会の管轄ということもあり連携が取りやすい。図書館、学校共に4月には職員の異動があり、特に学校は、この事業の対象が3年生であるため担当者は毎年替わるが、事業はたち切れることなくきちんと引き継がれている。また、図書館も

ボランティアの任期は一年で毎年募集が行われるが、経験者の申し込みも多く、人数の確保もできており、取り組みは継続されている。

#### (活動の実際)

今年度2024年は、3年生・407名・11クラスを対象に行われ、各クラスに1名から2名の講師を派遣した。講習は、各教室にて、5限目は講義。6限目は練習と実演を班別に行い、講師が助言をするという形になっている。

講習内容は、5限目の講義で「読み聞かせの活動の意義や心構え・手法」「絵本の選び方」そして、講師の「絵本の読み聞かせの実演」になっている。読み聞かせの意義や心構え、手法などを伝えることにより、絵本の読み聞かせの魅力や大切さを知ってもらう。



「絵本の選び方」では、いろいろなジャンルの絵本を紹介している。絵本を紹介することにより、いろいろな絵本に触れてもらうことは勿論だが、幼い頃、読んでもら

っていたとはいえ、中学生になり、絵本からずいぶん遠ざかっているであろう彼らに、絵本の楽しさを思い出してもらうことにもなっている。また、知らなかった絵本との新しい出会いも提供できる。

「講師の実演」では、絵本を読んでもらえることの楽しさを味わってもらう。



6限目は「読み聞かせの実技指導」となっている。班ごとに分かれて、生徒同士で読み合いをしたり、お互いに実演に対する感想を言ったりする時間を持つ。講師は、班を回り個人ごとに助言したり、質問に答えたりする。

講師には、生徒に対して読み聞かせの技術の指導も必要だが、生徒が自信をもって当日小学生に読み聞かせをし、楽しいコミュニケーションの場となるような指導を心掛けてもらっている。

この事業に使用する絵本は、講義当日より20日前くらいまでに、市民図書館から学校に生徒数の倍以上の冊数を前もって届けている。その中から中学生が自分で選ぶようにしている。

学校に届けられる絵本の選書は、市民図書館司書が行っている。

また、講師として派遣されるボランティアの事前講習も図書館司書が毎年行っている。



(成果・課題・まとめ)

公立図書館として、地域の学校への支援は、取り組むべき大切な事業のひとつであると考えている。それは、一般的に思われている「本の貸し出し」という業務だけでなく生徒、児童の皆さんが本に親しみ、読書を楽しむことへの支援であり、子どもたちが「図書館」という存在を知る良いきっかけにもなっているのではないと思う。

この事業には、ボランティアの協力は大きな力となっている。また、ボランティアにとっても「講師としてスキルアップを図る」ことは自分磨きにつながり、何より若い人との交流ができ、それらが生きがいにもなっている。そして、中学生からみれば、地域のボランティアの人たちとの交流は、世代を超えたつながりを経験でき、歳の離れた人たちへの思いやりを持つきっかけにもなっているようだ。一昨年、終わりの挨拶の時に、生徒さんたちが、「お体を大切に。来年もぜひ来てください」と言ってくれて嬉しかったと80歳を迎えたボランティアさんから報告があった。自分の特技をいかし、いつまでも社会の役にたてることは、この上もない幸せなことだと思う。また、ある女子生徒さんは、『「私が小学生の時、中学生に読んでもらったことが忘れられなくて、絶対この学校に来たいと思いました」と話してくれた。また、他の女子生徒さんは「この授業で大好きな絵本に出合った。来月のお小遣いで買いたい」と言っていた。』というような報告もあった。

学校からは「読み聞かせについて経験の乏しかった生徒たちは、ボランティアの皆様から教えていただいたことを活かしながらその後も練習を重ね、本番に備えました。小学生の反応も大変良く、生徒たちにとって、楽しく意義のある経験になりました。この活動を通して学んだことが、生徒たちの今後の生活に繋がっていくことを期待しているところです。」とお礼の文書をいただいた。

この事業は、学校という場所が中心となり、いろいろな立場の人と人々が、精神的につながるきっかけを作っている。また、年に1度とはいえ、長年にわたり続けられてきたのは、この事業に携わってきた人たちの熱意があつてのことだろうが、資金や人材の確保の面で安定していることも大きいのではないだろうか。

課題としてあげるならば、年々ボランティアの新規申し込みが少なくなっているらしいということである。人数だけでなく、ボランティアの年齢の層が広がっていくことも願っている。

(調査活動を通して)

私は、学校と図書館がタイアップして、子どもたちのために行っている事業を調査した。中学生が中心となり、小学生と地域のボランティアが、世代、場所を超えて繋がることができている。地域のためという活動のひとつとして、読み聞かせの良さ、魅力を通じ、次代を担う子どもたちが、地域の大人たちと共に素晴らしい未来を共に築いてくれているのではないかと考える。この事業を多くの学校に知ってもらい、広まっていくことを願っている。

今回は、学校から依頼を受けた図書館側からの調査になったが、機会があれば、この学校の他の取り組みも調査させていただき『学校を核とした地域づくり～子どもと大人が学ぶ合う地域づくり～』を考えていきたいと思う。

(調査者:佐藤 真由美)



## ⑱【高齢者支援】（主体：医療・福祉）

事例：社会医療法人関東会 坂ノ市リハビリテーションセンターもみの木の取組

### （取組の概要）

社会医療法人関東会が運営する介護保険サービス「坂ノ市リハビリテーションセンターもみの木（以下、坂ノ市もみの木）」（通所リハビリテーション）では、主に地域に住む介護保険を持つ障がいのある高齢者にリハビリを提供している。その人がその人らしく生きがいを持って地域で生活を送るために、施設内でのリハビリのみならず、社会と繋がるリハビリテーションに力を入れている。

「その人のしたいこと」を応援するために、地域の資源を活用したリハビリとして、地域にある高齢者が管理できなくなった空き地をお借りして、地域共生型農園で活動をし、多世代交流として、子どもたちとの接点を持つリハビリの取組みの中で、当法人とも協働し、そのような活動の場を創出している。

### （調査先）

名称	社会医療法人関東会 坂ノ市リハビリテーションセンターもみの木
連絡先等	住所：大分市坂ノ市中央1丁目269番 坂ノ市病院3階 電話：097-578-6835 HP： <a href="https://sites.google.com/view/reha-mominoki">https://sites.google.com/view/reha-mominoki</a>

### （沿革・取組の経緯）

○2015年(平成27年)4月

坂ノ市クリニックの3階に、通所リハビリテーション「坂ノ市リハビリテーションセンターもみの木（定員40名）」を開設。

○2018年(平成30年)4月

坂ノ市クリニック（19床）が増床し、坂ノ市病院（36床）となったタイミングで、定員を40名から50名に増員。現在に至る。

### （背景・課題）

家族が遠方におり、独居生活の高齢者や同居していても家族は共働きなどで、日中の支援には限度がある。そのような背景もあり、坂ノ市もみの木に通われる利用者は、自宅と坂ノ市もみの木の行き来で終わることも少なくない。体を動かし、足腰が弱らないようにし、運動をすることも大事だが、社会との繋がりをいかに作るかに念頭において、リハビリを提供している。社会との繋がりのある人は、心身機能が低下しにくく、認知症の予防にも効果的である。坂ノ市もみの木だけでは、社会との繋がりを創出することに限りがあるため、地域住民や公民館、地域の他業種と繋がりを持ち、活動の場を創出している。

#### (組織・体制)

職員は、リハビリ専門職が6名、看護職員2名、介護職員10名、事務1名が勤務している。職員は子育て世代も多く、学校のイベントが重なったり、子どもの体調不良で急遽お休みしたりすることもあり、職員間で協力をしながら、一日45名程度の方々を自宅に迎えに行っている。

他の事業所と比較してリハビリ専門職を多く配置しており、パワーリハビリやレッドコードというリハビリ機器を活用し、3か月おきに利用者の心身機能の評価を写真や動画を使用して行っている。

それをもとに、一人ひとりにあたりリハビリのプログラムを提供し、リハビリテーション会議を自宅で家族も含め定期的開催していた。利用者の生活課題を踏まえ、全スタッフでリハビリテーションに取り組んでいた。

#### (活動の実際)

利用者のしたいことや今までしてきた仕事や趣味などを再び誰かのサポートのもと、行えるように取り組んでいる。一緒に活動している地域共生型農園「坂ノ市オレンジファーム」では、90歳代の利用者も参加し、いきいきと畑仕事を行っている方を見ることもできた。気持ちも若く、好きなことをしているときには自然と体が動いているようだった。

また子どもたちと一緒に活動を行うことで、多世代交流ができ、高齢者も喜んでいて。特に一緒に行う、クッキング教室では、物忘れが多い高齢者だが、料理などはしっかり覚えており、多世代で行う食育活動もお互いに有効な活動と感じた。

#### (成果・課題・まとめ)

それぞれの強みを活かした関わりは、様々な活動を生み出し、単一事業所ではできないことが可能となり、またお互いにメリットのある相乗効果の高い活動が行えているように思う。また地域の方々も巻き込み、人が人を呼び、意義のある活動が行えているように思う。このような関わりこそが地域共生社会の一步となり、地域住民同士だけでなく、地域の企業間が繋がることでより強固な地域共生社会が実現できると感じる。

#### (調査活動を通して)

今回、より深く活動を知ることで、制度的なことはわからないが、難しいことは補い合うことが大切だと改めて思った。今後も、それぞれの強みを活かした活動を行うことができればと思う。

(調査者:若林 優子)

## ⑱【生涯学習】 (主体：行政・公共施設)

### 事例：直入町史談会の取組

#### (取組の概要)

- ・直入町史談会は市民教養大学直入学級と並ぶ公民館生涯学習の代表格であり、「つどう・まなぶ・つながらる」を実践する地域団体である。
- ・直入公民館を拠点にして地域内外の文化を掘り起こしながら楽しく学ぼうという団体である。

#### (調査先)

名 称	直入公民館(林 寿徳 館長)
連絡先等	住所：竹田市直入町大字長湯8208-6 電話：0974-75-2240 Mail：kyoiku-nao@city.taketa.lg.jp

#### (沿革・取組の経緯)

- ・公民館社会教育(生涯教育)の代表的な自主団体として平成元年発足。
- ・公民館が支援、育成している団体である。

#### (背景・課題)

参加者全員が60歳以上。次の世代へつなげる為にも、若い人達に史談会の活動を知って興味を持ってもらうことが必要。また、学校や地域にも活動内容を知ってもらい、取り組みを少しでも長く続けていくことが必要。

#### (組織・体制)

- ・会員20名、全員が60歳以上。
- ・役員は会長と事務局(副会長)の他公民館が顧問(研修部長、事務局補佐)を務める。

(活動の実際)

年間の活動は6回、公民館での座学と現場の視察研修が半々。活動範囲は町内だけでなく市外や県外まで足を伸ばすこともある。

【活動内容】

(各年度3講座程度抜粋)

年度	月	内容・テーマ	場所・研修先	備考
2	10	直入キリシタン講座第1弾	公民館・現地	31人
	11	豊後岡藩の光芒	竹田歴史文化館	15人
	1	直入キリシタン講座第2弾	公民館・現地	31人
3	4	天領下竹田と岡藩長湯の庄屋	公民館	15人
	6	竹田キリシタンと広瀬神社	キリシタン資料館	14人
	11	延岡城と西郷宿陣跡・旭化成	延岡市	16人
4	4	直入キリシタン講座第3弾	公民館・現地	32人
	11	城下町秋月と宿場町吉井	朝倉市・うきは市	16人
	3	臼杵城と二王座の歴史探訪	臼杵市	16人
5	5	岡藩と肥後藩の参勤交代	公民館	17人
	8	豊薩戦争	竹田商工会議所	14人
	9	史談会活動展(見ちよくれ祭)	公民館	20人
	11	熊本城復興	熊本市	17人

(成果・課題・まとめ)

- ・地域内外の歴史文化を掘り起こして楽しく学ぶ団体であり公民館が活動を支援することにより公民館を拠点として学校や地域ともつながりが持て、地域教育の協働という観点からも意義が大きい。
- ・生涯学習としての意義だけでなく、地域学の伝承者として次の世代に歴史文化遺産を伝えていく事も重要な使命と考える。

(調査活動を通して)

史談会の活動は何となく知ってはいたものの、今回詳しく説明を聞くことができた。自分たちも知る必要があり、次の世代にも伝えていかないといけない大切な取り組みだと感じた。年配の方が多いが、皆さん楽しみに参加されていて、興味を持って学ぼうとする姿勢に生涯学習の大切さを実感できた。

(調査者:峯野 希美)

### 3. 研究調査の分析と考察

研究調査のねらいの項でも述べたが、「地域社会と地域住民のウェルビーイングの実現」というような大きなテーマを立て、調査対象の個人や団体については個々の社会教育委員に任せてインタビューを行ったため、精緻な分析は難しい。唯一、報告の際の様式として、活動の概要、沿革・取組の経緯、背景・課題、組織・体制、活動の実際、まとめ、を例示したので、手がかりはそこに求めることになるのだろう。個々の取組の中で特筆すべき部分と全体に共通する視点を整理しながら、考察してみたい。

調査対象を取組内容から整理分類すると、およそ5つに分けられた。「防災」(3)、「地域づくり」(7)、「若者支援・子ども支援」(7)、「高齢者支援」(1)、「生涯学習」(1)である。「地域づくり」と「若者支援・子ども支援」がそれぞれ7件ずつあり、全体の7割を超えている。社会的な課題である「防災」と「高齢者支援」を含めると、現代的課題で占められていることになる。もちろん、地域の歴史の掘り起こしと継承を目的とした「生涯学習」も地域にとっては現代的な課題と位置づけられるのかも知れない。

それでは、分析の視点を示しながら、収集された事例・取組を見ていきたい。

#### (1) 活動の主体は誰か

明確な根拠の下に、客観的に分類するのは困難であるが、発足のいきさつ等も考慮しながら以下のような整理をしてみた。(事例の数字は掲載順である。)

- ①社会教育行政・施設・その委託 4事例(6・9・17・19)
- ②社会教育関係団体・学社(地)協働体制 2事例(4・11)
- ③経営基盤の整った民間企業・法人等 3事例(1・15・18)
- ④ボランタリーな民間団体・グループ 8事例(3・5・7・8・10・12・13・16)
- ⑤個人 2事例(2・14)

④のボランタリーな民間団体・グループが最も多くなっているが、敢えて特出したかった⑤の個人も、結果的には仲間を得て団体となっている。そう考えれば、10事例が同種の主体として括ることができる。約半数の事例が、ボランタリーな活動であると言える。もっともその中にも法人格を持つ団体もあれば、完全な任意団体もある。

続いて、①の社会教育行政やそこが管轄する施設、行政の委託を受けて活動している主体が4つある。②の社会教育関係団体(婦人会)やコミュニティ・スクールを支える地域学校協働組織も①と同様の位置づけだと考えれば、6事例となる。教育行政と民間団体との連携・協働はこれまでも行われてきて、今後も必要であると考えられる。社会教育委員会議は、団体への補助金に関して審議、承認する役割も担っている。公共性の高い活動を行う団体の支援については、緊張関係を保ちつつ、積極的に行っていく必要があるだろう。





## (2) 社会教育行政・施設はどのような存在であることが求められているのか

社会教育行政・施設は、地域住民へ教育サービスを提供する役割を担っている。そのため、民意を受けた行政計画の達成のために仕事をしなければならない。とは言いながら、行政が全てのことを引き受けるだけの人材や組織力があるわけではない。地域の課題解決のために、企業や民間団体、地域住民との豊かな協働ができる行政であることが、望ましい在り方だと言ってもよい。その意味では、行政機関が地域づくりグループに対して事業委託をしながら、地域住民を巻き込む活動を支援することには意義がある。前津江振興局の地域団体の背中を押して地域の課題解決に取り組む事例は参考になる。

ここでは、ふたつの団体が取り上げられているが、メンバーの経験（農業：野菜等の種や田畑にまく堆肥の販売等につなぐ）が有効に生かされており、地域づくりや課題解決の前に、地元への貢献やそれを通した生きがいなどが生まれそうである。また、農業に従事する者の高齢化が主流になってくると、遠くまで集出荷することができなくなってきた。そこで、高齢者の代わりに地域づくりグループが集出荷に関わることで、農業が維持されるようになった。そういった、ひとつひとつの努力の積み重ねが地域づくりなのかもしれない。

## (3) 社会教育関係団体の新たな挑戦

社会教育関係団体は当該自治体が承認・認定する、地域で社会教育活動を展開している団体である。（社会教育法には、「法人であると否とを問わず、公の支配に属しない団体で社会教育に関する事業を行うことを主たる目的とするもの」と定義されている。）自治体によっては、社会教育委員会議にて提案があり、承認・認定の可否が審議されることもある。（それは団体への補助金の交付と審議と深く関係している。）名称等は異なるかも知れないが、代表的な団体として子ども会（子ども会育成会）、ボーイスカウト・ガールスカウト、スポーツ少年団、青年団、婦人会、老人クラブ等があり、原則地縁団体である。これらの団体の多くが会員減や活動維持等の課題を抱え、存続の危機に晒されていることは周知のことである。

さて、その中で「心の通い合う地域づくり」を目指して活動に取り組む地域婦人団体連合会の報告があった。特筆すべき活動は、「里カフェ」というワンコイン食堂であり、年中営業している。これまで婦人会のイメージと言えば、あらゆる地域の行事・催事を下支えする団体であった。そのことは、忙しい婦人会のイメージを固定化させ、会員の新規加入を阻んできた。そこに地域の課題に応えるための「里カフェ」を令和元年より開始し、営業活動を継続している。豪雨災害時にも営業し、困っている住民を励ましたそうだ。また営業による収益の一部（とは言っても、ボランティア精神なくしては続かないだろう。）が報酬としてスタッフに与えられており、ここが従来の婦人会の活動とは一線を画するところではないだろうか。地域で自走できる社会教育関係団体の存在は心強いものがある。

## (4) 経営基盤の整った民間企業・法人等の力がなぜ必要か

地域づくりの分野に関して、企業・法人の社会貢献（CSR（Corporate Social Responsibility）：企業の果たすべき社会的責任）の重要性が今世紀に入って当たり前にな

ってきた。いくらグローバルに活動を展開している企業であっても、従業員は近隣の地域で暮らしている。消費者も所在する地域にいるだろうし、未来の従業員もそこにいる。さまざまな循環を考えると、企業経営は当然ながら地域とともになくてはならない。

今回の研究調査の中で、唯一といってよい地域の民間企業の事例があった。その会社の経営理念が素晴らしく、CSR活動を超えて、会社丸ごと地域貢献、そして地域の暮らしが困った時にこそ役立つ企業でありたいと考えている。企業は利益を生み出すことで持続可能な活動ができるわけだが、製品やサービスを利用してくれる地域があるからこそその企業が存続できる。だからこそ、会社の得意分野で地域に貢献できることを積極的に見つけていく。その精神が社員にも浸透し、さまざまな発想やアイデアが生まれやすい風土をつくっている。能登半島地震災害の折に、非常用キットの貸し出しが迅速にできたことなどは、日常的な意識や取組の成果であったろう。

ウェルビーイングとは真逆の状況が災害発生時と復興までの期間である。地域住民同士の共助では埋められない隙間を、地域の民間企業の得意分野で埋めることの重要性がこの事例から明らかとなった。ウェルビーイングの実現に向けて、地域に所在するあらゆる主体の意思や関りに広がりが見られればよいと感じさせられた事例である。

#### (5) ボランタリーな民間団体・グループが地域の活力と価値を高める

再び、WHOのウェルビーイングの定義を参照しよう。「病気でないとか、弱っていないということではなく、肉体的にも、精神的にも、そして社会的にも、すべてが満たされた状態にあること」とある。そのために必要なことは、a)地域の「安全・安心」であり、b)楽しく暮らせる「豊かなコミュニケーション」であり、c)心安らぐ「居場所」と「活躍の場」である。

a)地球温暖化の影響であろうか、かつて経験したことのない豪雨災害が全国各地で頻繁に起きようになった。命や財産を守るために活動する地域の防災士の存在は今後ますます高まってくるだろう。今回は、防災士会が企画・運営する地域の子どものための「ぼうさいキャンプ」が報告されている。(校区の中学3年生の希望者が参加)平成29年7月の九州北部豪雨での災害を教訓にして、決して風化させないよう防災・減災の意識を浸透させようとする活動でもある。「天災は忘れた頃にやってくる」(寺田寅彦)のであり、「備えあれば患(うれ)いなし」、さらに備えをすることで人と人をつなごうとする試みでもある。それはそもそも日帰りだった取組を1泊2日の「ぼうさいキャンプ」として、寝食を共にする活動へと進化させたことからもうかがえる。地域の「安全・安心」に心血を注ぐ大人の姿は、きっと子どもの心に残るはずである。

b)平成16年の設立時には女性だけのサロン活動であったものが、平成28年には地域の課題(高齢者孤独感、生活意欲の低下等)に応えるべく、「食」を核とした「和ッショイカフェ(←食堂)」へと発展した。活動の理念は、「住民どうしのきずな(ネットワーク)づくり」、「孤立化予防と



心身の健康増進」、「運営者・参加者それぞれの生きがいづくり」である。カフェの運営については、スタッフが無理なく続けられ、参加者が次回を待ちわびる、月1回の絶妙な設定が功を奏しているのかも知れない。また、スタッフの高齢化が進む中で、新たに40代・50代のスタッフが加入し、若い世代が活動を続けられるように、食堂からカフェへ転換したところも重要なポイントではないだろうか。時代に合わせるこの柔軟性が、新しい仲間を引き込むことと、活動の持続可能性をもたらすのであろう。高齢者の住みよい地域は、全ての人が住みよい地域でもある。豊かなコミュニケーションが生み出される「場」の運営と継続は、超高齢社会を迎えた地域のよいお手本ではないだろうか。

c)大分県独自の「協育」ネットワークの普及以降、学校という場で地域と子どもがつながる機会は増えてきた。しかしながら、地域という場で地域と子どもがつながる機会は減ってきてはいないだろうか。それを市内の高校生までを対象とする子どもの会を立ち上げ、子どもの居場所と活躍の場をつくった、「もやし会」(市内の小中高校生を対象)と「だいず会」(もやし会の保護者を中心とした支援団体)の報告がある。地域住民が子どもに期待し、「日曜カフェ」や「地元の空き家調査」、「地域の海岸清掃」、「イベントへの駄菓子屋出店」を次々と依頼し、それに向けた準備と実施をするのである。地域行事に子どもが関わることで、全体の参加人数も増えて、相乗効果をもたらしている。特筆すべきは、市の土地を活用した公園づくりのために、クラウドファンディングで250万円の資金を得て、地域の人たちと協力して、土地を整備したり、手作り遊具を制作したり、努力の結果、令和5年8月に約半年かけて完成に漕ぎ着けたことである。子どもたち自身の夢を叶えるまでのプロセスに、当事者として関わることでできた経験は、きっとその後の人生に豊かさをもたらすだろう。夢を実現させるための方法はあるし、そのための努力を惜しまなければそれは叶うのだ。

a~cに該当する事例をひとつずつ選んで紹介し、ウェルビーイングの視点で解釈してみた。本当は、全ての事例が、影響力の多寡はあるにせよ、地域住民のウェルビーイングと広く地域のウェルビーイングにつながる活動であった。

## (6) 個人の行動力が生み出す地域の未来

きらりと輝く活動をしている方に共通することは、人間的に純粋な部分が信念を形成し、活動につながっているところではないだろうか。サーバント・リーダーシップ(奉仕的なリーダーシップ)が頭をよぎる。ウェルビーイングが人間の健康や幸福のみを意味するのではなく、地球そして地球上全ての生命のウェルビーイングを意味していることを考えると、魅力的な活動ほど自然と公益につながっている。サーバントにおいても、欲求とニーズの見極めに重きを置いている。例えば、「欲求とは、心身に及ぼす影響をまるで考えない願い、希望」であり、「ニーズとは、人間としてよい状態にあるために、心身が正当に求めるもの」であるとする。また「奴隷は他者の欲求を満たす」ことを引き合いに出し、「奉仕者(=サーバント・リーダー)は他者のニーズに応える」とする。これらの言葉はとても示唆的である。

市役所を早期退職して、自分自身の地域への責任の果たし方をいち早く実現した人がいる。そ



れは行政職員として中枢で公務に取り組んだこと、平成29年の台風災害で被災しながら公務に当たったこと、それらが影響しているようだ。令和4年にコミュニティ食堂「志縁や」を立ち上げ、現在では復興サポート食堂と位置付け、営業利益を公的事业に還元している。「営公（栄光にかけている？）の架け橋」という馴染みのフレーズを使い、民と公の新しい協働スタイルを提案している。また「志縁や」の活動は食堂の営業のみならず、夢の実現を目指しているがノウハウのない人への惜しみない相談活動も行っている。「情けは人の為ならず」という言葉通り、誰かのために生きることが自分の自信と喜びに跳ね返ってくると言う。さらに、地域におけるサーバント・リーダーとしての生き方が、別の人へも伝播することが期待される。

## (7) まとめ

「誰かのため」、「何かのため」、「自分の夢を実現するため」、「今、行動しなければと思ったため」、「使命感に突き動かされたため」、「私がしなくて誰がする？と考えたため」、「世の中を変えるため」、人が地域の中で行動を起こす際には様々な理由や動機がある。学校とは違って、社会には唯一絶対の正解などはない。行動した結果が上手くいったのか、そうでないのか、に分かれるだけである。また、夢や信念、ビジョンなどを語れる人は、周囲の人を惹きつけたり、巻き込んだりできる。逆に、人に上手く頼れる人も仲間をつくることができる。人は一人では生きていけないし、課題や困難に対しても一人では無力なことが多い。ウェルビーイングの実現に向けても同じことが言えるのではないか。何かを実現するための近道に協働があるのだろう。



## おわりに

調査研究のねらいの項目でも述べたように、「地域社会と地域住民のウェルビーイングの実現」という包括的なテーマのみ共有し、今回の調査研究に臨んだ。少々思い切りがよすぎたかも知れないが、独任制の社会教育委員という観点からするとあながち的外れではなかったと振り返っている。委員の興味・関心やネットワーク、社会教育への思いが伝わる報告書に仕上がった。

今回の調査研究のもうひとつのねらいは、次期以降の社会教育委員会議で協議すべきテーマの洗い出しであった。本調査研究の成果はもとより、令和6年度第2回及び第3回社会教育委員会議にて交わされた意見も踏まえて、報告書を締めくくりたい。

調査研究の分析と考察の項目にも記載した通り、大分県社会教育委員の関心は、「地域づくり」、「若者支援・子ども支援」、「防災」、「高齢者支援」等であり、教育基本法にある「社会の要請」に沿った現代的課題に集中していた。持続可能な地域の未来を考えていかなければならないという、地域の担い手でもある委員の思いや願いの現われであろう。ここに報告された好事例は、ひとつひとつが秀逸であり、笑顔で活動されている方々の姿が目につく。一方で、活動の継続や後継者の育成については共通の課題を抱えているようにも見受けられる。今回の事例の中には、新しい仲間（後の担い手）が現れたタイミングで、それまでの方法に固執せず、活動の在り方を柔軟に見直すことで、継続と後継者の課題を克服しているものもあり、大いに参考になった。これら事例の実践者の方々には、社会教育関係者の研修にて講師を務めていただけるよう大分県並びに市町村教育委員会には検討を願いたい。

また、社会教育委員会議において出された別の観点の意見も紹介しておきたい。

- ① 子どもの育ちの場である家庭・学校・地域の中で、問題が見えづらいのが家庭である。そこには同時に保護者の深刻な孤立がある。社会教育関係団体であるPTAや子ども会・育成会の組織率が低下する中で、保護者同士のつながりが希薄になっていることも気がかりである。家庭教育支援についても社会教育の視点から掘り下げて協議した方がよいのではないか。
- ② 社会教育人材、とりわけ社会教育主事や社会教育士の県内の実態を踏まえ、計画的な資格取得や発令、配置、交流等に力を注ぐ必要があるのではないか。
- ③ 大分県は九州内で外国人居住者の多い県であるという特性を生かし、グローバル人材の育成であったり、異文化交流であったり、共生社会の実現であったりと、未来社会を見通した取組が検討されるべきではないか。
- ④ 共生社会の実現という観点では、障がい者の生涯学習にも関心を向ける必要があり、特に特別支援学校を卒業した後の学習支援が検討課題となるだろう。
- ⑤ 地域に根差した活動の中にはまだ光が当てられていないものがたくさんある。社会教育という網をかけ、そこに光を当てたり、つないだりする方法を検討する必要があるのではないか。



そこで、過去10年間の建議の内容や重複等へ配慮しつつ、以下の8つのテーマを次期以降の研究テーマとして提案してみたい。どのテーマも今期の社会教育委員会議で掲げてきた「地域社会と地域住民のウェルビーイングの実現」につながるものである。

- 子どもや若者が地域の担い手・支え手として活躍できる地域づくり
- 保護者の悩み解決や保護者同士のつながりを支援する地域づくり
- 高齢者の生きる知恵を引き出し・引き継ぎ・語り継ぐ地域づくり
- 障がい者が生涯にわたり豊かに学び・暮らせる地域づくり
- 社会教育人材(社会教育主事・社会教育士等)の活躍できる地域づくり
- 地域住民を縦・横・斜めにつなぐ地域づくり
- 多発する自然災害に備えた地域づくり
- グローバル社会の到来を見据えた人材育成と多文化共生の地域づくり

次期以降の社会教育委員会議で協議するテーマを縛るものではないが、検討材料のひとつとなることを願う。



## 【 卷 末 資 料 】

- ・大分県社会教育委員名簿
- ・調査審議の経過
- ・関係法規

# 大分県社会教育委員名簿

任期:令和5年5月1日～令和7年4月30日

選出分野	氏名	職名及び所属
学校教育関係者	山崎 佐和子	学校法人三信学園 理事長
	衛藤 恭子	豊後高田市立高田小学校 校長
	森脇 郷子	佐伯市立上堅田小学校 校長
	石井 圭一郎	大分県立爽風館高等学校 校長
社会教育関係者	和田 俊二	大分県高等学校PTA連合会 会長
	平本 泉	大分県PTA連合会 副会長
	足立 達哉	竹田市久住公民館 館長
	安達 美和子	大分県地域婦人団体連合会 理事
	門脇 邦明	NPO法人ハットウ・オンパク 事業マネージャー
	佐藤 真由美	人と本を結ぶ読書支援プロジェクト「ゆい(結い)」 主宰
	高尾 徳昭	日田市公民館運営事業団 事務局員
家庭教育関係者	若林 優子	NPO法人子育て応援レストラン 理事長
	園田 暁子	くすのき児童クラブ 統括代表
	峯野 希美	竹田市直入放課後子ども教室 コーディネーター
	萱島 かよ	国東市協育ネットワーク推進協議会 コーディネーター
学識経験者	枝木 東海	株式会社デンケン管理本部人材開発部 部長
	高見 大介	日本文理大学学長室員・人間力育成センター長・工学部 助教
	植山 朋代	府内耳鼻咽喉科 副院長
	清國 祐二	大分大学大学院教育学研究科 教授
	永田 誠	大分大学教育学部 准教授

(令和7年3月現在)

## 調査審議の経過

### 令和5年度

日時・場所	会議内容
6月15日(木) 県庁新館大会議室	<b>第1回会議</b> ・令和5年度大分県社会教育課重点方針および関連事業について ・今期の研究調査について(協議) 大分県の社会教育の取組に関して、期待すること、取り組むべき課題や取り上げてみたい内容などについて
9月8日(金) 県庁新館大会議室	<b>第2回会議</b> ・「地域社会の幸せ」について(協議) 考え方やどういった状態なのかについての意見交流 具体的に活動をしている人や団体について紹介 ・テーマの決定
2月9日(金) J:COM ホルトホール大分 (201・202 会議室)	<b>第3回会議</b> ・研究調査活動についての説明および共通理解 ・事例発表を通じた研究調査活動に向けた事前演習 今後の調査に必要な質問内容やテーマに迫るための視点の共有
※2月～	各委員による研究調査活動の実施

### 令和6年度

日時・場所	会議内容
6月27日(木) 県庁新館133会議室	<b>第1回会議</b> ・インタビューシートを通じた研究調査内容の交流 ・研究調査活動から見えてくるもの(協議) テーマに沿った内容での意見交流
11月21日(木) 県庁新館大会議室	<b>第2回会議</b> ・研究調査報告書の具体的内容を検討
2月13日(木) 県庁新館133会議室	<b>第3回会議</b> ・研究調査報告書の内容の最終検討 ・報告書を基に考えられる「社会教育の役割」について
3月下旬	社会教育課へ報告(研究調査報告書の提出)



## 関係法規

### 社会教育法(抄)

#### 第四章 社会教育委員

(社会教育委員の構成)

第十五条 都道府県及び市町村に社会教育委員を置くことができる。

2 社会教育委員は、教育委員会が委嘱する。

(社会教育委員の職務)

第十七条 社会教育委員は、社会教育に関し教育委員会に助言するため、左の職務を行う。

一 社会教育に関する諸計画を立案すること。

二 定時又は臨時に会議を開き、教育委員会の諮問に応じ、これに対して、意見を述べること。

三 前2号の職務を行うために必要な研究調査を行うこと。

2 社会教育委員は、教育委員会の会議に出席して社会教育に関し意見を述べることができる。

3 市町村の社会教育委員は、当該市町村の教育委員会から委嘱を受けた青少年教育に関する特定の事項について、社会教育関係団体、社会教育指導者その他関係者に対し、助言と指導を与えることができる。

(社会教育委員の定数等)

第十八条 社会教育委員の委嘱の基準、定数及び任期その他必要な事項は、当該地方公共団体の条例で定める。この場合において、社会教育委員の委嘱の基準については、文部科学省令で定める基準を参酌するものとする。

### 大分県社会教育委員条例(抄)

第一条 社会教育法(昭和24年6月法律第207号)第十五条に基づき社会教育の振興に資するため大分県社会教育委員(以下委員という)をおく。

第二条 委員の定数は二十人以内とする。

第三条 委員は、学校教育及び社会教育の関係者、家庭教育の向上に資する活動を行う者並びに学識経験のある者の中から、大分県教育委員会(以下「教育委員会」という。)が委嘱する。

第四条 委員の任期は2年とする。欠員補充の場合は前任者の残任期間とする。ただし特別の事情ある場合は任期中解嘱することができる。

第五条 委員は年三回会議(以下「委員会」という)を開く。ただし必要に応じて臨時に開くことができる。

第六条 委員会は教育長が招集する。

第七条 委員会は委員長及び副委員長を互選する。

2 委員長は委員会の議長となる。

3 副委員長は委員長を補佐し委員長に事故のあるときはその職務を代理する。

第八条 委員会は委員定数の二分の一以上出席しなければ開会することができない。

第九条 委員会の議事は出席委員の過半数をもって決する。可否同数なるときは委員長が決する。

第十条 委員会は必要に応じ専門的な事項を審議するため専門部会を開催することができる。

第十一条 専門部会の開催に必要な事項は委員会で定める。



大分県社会教育委員会議による研究調査報告書  
「地域社会のウェルビーイングを実現するための  
社会教育の役割」について

発行年月	令和7年3月
発行	大分県教育庁社会教育課 〒870-8503 大分市府内町3-10-1 TEL 097-506-5525
印刷所	株式会社 明文堂印刷

